



現代アラブ世界の展開と学術用語の整備
—タアリーブ(アラビア語化)による外来語受容とナハトによる造語法を中心に—

The Growth of Modern Standard Arabic
and the Adaptation of Scientific Technological Terms
with Special Reference to *Ta'rib* and *Naḥt*

竹田 敏之 Toshiyuki Takeda

Kyoto Working Papers on Area Studies No.25
(G-COE Series 23)

February 2009

このグローバル COE ワーキングペーパーシリーズは、下記 G-COE ウェブサイトで閲覧する事が出来ます
(Japanese webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/staticpages/index.php/working_papers

(English webpage)

http://www.humanosphere.cseas.kyoto-u.ac.jp/en/staticpages/index.php/working_papers_en

©2009

〒606-8501

京都市左京区吉田下阿達町 46

京都大学東南アジア研究所

無断複写・複製・転載を禁ず

ISBN978-4-901668-49-1

論文の中で示された内容や意見は、著者個人のものであり、
東南アジア研究所の見解を示すものではありません。

このワーキングペーパーは、JSPS グローバル COE プログラム (E-4) :
生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点 の援助によって出版されたものです。

現代アラブ世界の展開と学術用語の整備
－タアリーブ(アラビア語化)による外来語受容と
ナハトによる造語法を中心に－

竹田 敏之

Kyoto Working Papers on Area Studies No.25
JSPS Global COE Program Series 23
In Search of Sustainable Humanosphere in Asia and Africa

February 2009

現代アラブ世界の展開と学術用語の整備

—タアリーブ（アラビア語化）による外来語受容とナハトによる造語法を中心に—

竹田敏之

The Growth of Modern Standard Arabic and the Adaptation of Scientific Technological Terms with Special Reference to *Ta'rib* and *Naḥt*

TAKEDA Toshiyuki

The modern Arab world was born from the common bonds of the Arabic language and Arabic culture out of the process of the dismantlement of the traditional Islamic world represented by the Ottoman Empire in the nineteenth and early twentieth centuries. The present author has been examining the formation of the modern Arab world and the establishment of Arabic as a modern national language. For Arabic to become a modern language, it was crucial to structure the grammar in a way that was clear and easy for pupils in elementary and secondary schools to understand. Adapting traditional Arabic vocabulary to a modern context was another crucial task. In this paper, we discuss how the men of letters and linguistic specialists in the Arab world tackled this essential task of adopting a modern vocabulary in the 19th and 20th centuries.

Traditionally, the adaptation of foreign concepts and vocabulary was called “*ta'rib*”, or “Arabization.” In the classical periods, there were numerous discussions on this subject, as the Abbasid era witnessed a great period when a large number of mainly Greek scientific works were translated into Arabic. The Nahda (renewal) period in the 19th century, second only to the Abbasid precedent in its massive size, marked another great period when modern Western texts were translated into Arabic. Of the intellectuals of the Nahda period, al-Tahtawi, al-Shidyāq, and al-Yazīji were the most notable for their contribution to the “Arabization” of modern concepts and vocabularies. In this paper, their contributions are carefully cited and examined.

They also called for the formation of language academies where urgent issues for the Arabic language could be addressed and discussed. In the 20th century, such academies were established in Syria, Egypt, Iraq and other Arabic-speaking countries. These academies have served as a common public forum for debates on linguistic and cultural issues that concern all Arabic speaking peoples.

Ta'rib, or the adoption of modern terms in scientific and cultural fields as well as terms used in modern daily life was, in addition to simply importing foreign words in transliterated forms, basically done by one of the following two methods. The first, *ishtiqaq* (derivation), which created derived words from word-roots, was proposed and used widely to produce many new words. Since this method represents one

of the most important characteristics of Arabic, that is, producing new words by derivation, it has been favored in the process of importing Western concepts. The second, *naḥt*, that is, minting a new word by putting two or three words together, was also proposed. Some scholars preferred this method and tried hard to promote it. Arabic academies spent a long time discussing the *naḥt* method of creating new words, and came to the conclusion that, while it is very useful, its function should be restricted to scientific fields. Apparently, the need to foster Arabic as the “common and authentic” language of the Arabs influenced this outcome, while the need to develop a “modern” vocabulary could be served by either of the two methods.

はじめに——課題の所在

現代アラブ世界は、オスマン朝に代表されるような伝統的なイスラーム世界が解体する過程の中から、アラビア語とアラブ文化を紐帯として誕生した。アラビア語話者が歴史的に存在してきたからと言って、近現代に形成されてきた「アラブ世界」像を過去に投影することはできないこと、それゆえ現代のアラブ世界とアラビア語を理解するためには、近現代におけるその形成と展開を検討する必要があるということ、筆者がこれまでも論じてきたところである。19世紀以降に形成されてきたアラブ世界にとっては、近代的な文法、特に公教育においてアラビア語教育をおこなうための学校文法の整備が急務とされた。そこでは、古典的な文法体系を再考するとともに、言語的な伝統とも断絶しないような形で、現代アラビア語文法が整備されてきた¹。

しかし、現代におけるアラブ世界を成立せしめるために、現代的なアラビア語が必要としたのは、文法だけではなく。西欧との接触を経て、近代的な西洋文明、特に近代諸科学を吸収する過程で、そのような諸科学や近代的・現代的な諸問題を表現しうるような現代語となることが、アラビア語にとって必要不可欠であった。そこでは、外来語の受容または外来の概念のアラビア語化が大きな課題であった。ところが、そのメカニズムはこれまで明らかにされてこなかった。この問題は、現代アラビア語にとっての重要性にもかかわらず、アラブ世界研究・アラビア語研究において等閑視されてきたと言える。本論文では、その空白を埋め、近代的な学術用語の整備が形成期の現代アラビア語にとってそれがどのような問題であったのかを実証的に検討すると同時に、新しい語彙の造語等がどのようになされてきたかについて、具体的な事例を検討するものである。

他方、新規な学術用語をアラビア語固有の語彙群に取り込むという課題は、単に現代にだけ存在するわけではない。他の文明圏の文芸や諸科学を吸収しなければならない状況は、古典期にも存在した。その時代に、古典的なアラビア語が新語の吸収や造語について、どのように展開されたかは、現代における事例とも深く関わっている。そこで、最初にその歴史的過程についても考察を加え、さらに現代アラビア語について考究を進めることにしたい。

¹ 20世紀のエジプトにおける文法改革の流れと学校文法の整備については、古典期のアーミル論（作用論）と現代文法との比較を行いながら〔竹田 2006〕で詳しく論じた。さらに〔竹田 2009〕では、アラビア語の最大の特徴であるイウラーブ（語末母音の変化）をめぐる論争を跡付け、オスマン帝国崩壊後、いかにアラブ民族意識が形成され民族語としてのアラビア語が成立するに至ったのかを明らかにした。

I. アラビア語における「正則」認識と古典期におけるタアリーブ論

1.1. イスラームの誕生と語彙論の展開

イスラーム以前の2世紀間を指して使われる「ジャーヒリーヤ時代（無明時代）」を、アラブ文学史では「詩の時代」と呼ぶ。アラブ文学の最高傑作と評されるジャーヒリーヤ詩『ムアッラカート』の中心的舞台であったアラビア半島は、その一部にはマッカのように、シリア地方やペルシア、エチオピアへの交易ルートとして栄えた商業都市もあったが、概して部族と血縁関係を尊ぶ遊牧民的価値観に基づく生活が基本であった。言語としては、各部族がそれぞれの部族方言のアラビア語を用いる一方、交易による部族間の移動と商業的交流は共通語を必要とした。また各部族は自分たちの「お抱え詩人」を有しており、年に2回開かれるウカーズでの定期市は、各部族を代表する詩人が活躍する場となっていた。「詩のコイネー」としての共通アラビア語は、このような商業的・文化的交流から成立したと考えられている。ジャーヒリーヤ時代では、詩的言語としてのアラビア語が部族間の交流における重要な機能を担っていた。

『ムアッラカート』の語彙研究[al-Shāyī 1993]などが示すように、外来語の使用はジャーヒリーヤ時代から限定的に見られるが、この時代の人々の言語接触は特別な商人を除いてはアラビア半島の部族間を中心としており、記録された詩作では、外的要素が混入した非アラブ的語彙は非常に数が少ない[Fāyid 2004: 232]。外的要素が社会に混入していないということは、その時代のアラビア語の「純粋性」(ファサーハ *faṣāḥa*) を決定付ける重要な判断基準となっている。現代においても1400年以上も前のジャーヒリーヤ時代の語彙や用法を「正則的」とする所以はそこにある。そのため、アラビア語学におけるジャーヒリーヤ時代は、外来語研究の対象ではなく、語彙の正統性や語源研究の典拠として専ら登場する。

一方、イスラーム誕生の7世紀以降、イスラーム学が形成・発展していく中で、「イスラームの普遍語」としてアラビア語研究も大きく発展した。古典期の外来語研究の関心は、専らクルアーンの語彙の探求に向けられた。その担い手は、言語学者・啓典解釈学者、法学者であった。その議論の中心は「クルアーンの中に外来語は存在するか」にあり、特にクルアーンの文言「明瞭なアラビア語で下った」(Q. 26: 195 など)に関する議論は、特に法学者の間で見解を異にした。例えば、法学理論の創始者とされるシャーフイーは「クルアーンはアラビア語で下されたゆえに非アラブ的な語彙は含まれない」[al-Shāfi'ī 1988: 63]とする。また啓典解釈書の『クルアーンの修辭』(*Majāz al-Qur'ān*)で知られるアブー・ウバイダも「アラビア語以外で下ったと主張する者は法を超えた者である」[Abū 'Ubayda 1954: 38]と述べている。一方で、後述のジャワーリーキーや15世紀の大学者スューティーのように、クルアーンや古詩における外来の語彙に関する研究に貢献する学者も多く存在する。古典期の外来語研究、あるいは語彙のアラビア語化を論じる分野であるタアリーブ論(タアリーブの原義は「アラブ化」の意)の中心的関心はアラビア語の純粋性をめぐる議論であった。

1.2. 「ムアッラブ」と「ダヒール」

前述のようにアラブにおけるタアリーブ論は、聖典クルアーンにおける外来の語彙の解釈を主要目的

とし、啓典解釈学（タフスィール）や文法学の発展の中で進められた。この種の語彙は、日本語では「外来語」あるいは「借用語」²ということになるが、アラビア語では「ムアッラブ」（アラブ化された語）と呼び、語彙をアラブ化するその過程と営為を「タアリーブ」（アラブ化すること）と呼ぶ。それぞれ「アラブ」を意味する *ʾr/b* から派生してできた用語で、用語自体に「アラブ」が色濃く表れている点の特徴である。古典期では、この「ムアッラブ」の同義語として「ダヒール（*dakhīl*）」もしばしば登場する。「ダヒール」の原義は、「入ってきた（入られた）語」であり、アラビア語に入った外来の語彙を指す。西尾はコプフの研究 [Kopf 1961] を引き、借用語を「ムアッラブ」（アラビア語の語形パターンに則さない語彙）と「ダヒール」（純粋なアラビア語の語形パターンになっており、一見するとアラビア語だが、表の皮を剥すと外来語である単語）の2つに分類している [西尾 2006: 106]。しかし、アラブ世界の近年の研究では、古典期ではこの「ムアッラブ」と「ダヒール」が定義の差なく、学者や著作ごとに同義語として扱われていたことが指摘されている [Yūsuf 2002: 45]。例えば、アラブにおける辞書学の権威であるハムザーウィーの研究 [al-Ḥamzāwī 1986a: 171] が示すように、古典期の啓典解釈学や文法書における「外来の語彙」を意味する用語は、「ガリーブ（*gharīb*）」（難解語）、「アアジャミー（*aʿjamī*）」（非アラブ的な語）、「ダヒール（*dakhīl*）」（混入語）、「ムアッラブ（*muʿarrab*）」（アラブ化された語）と一定ではない。文法学・韻律学の祖であるハリール（175/791 年没）の『アインの書』に至っては、「ムフダス（*muḥdath*）」（新語）、「ムブタダア（*mubtadaʾ*）」（新奇な語）、「ムワッラド（*muwallad*）」（新造語）、「ダヒール（*dakhīl*）」（混入語）と4つの用語の混用が見られる [al-Ḥamzāwī 1986a: 161, 171]。アラビア語辞書の最高峰と称される『アラブの言葉』（*Lisān al-ʿArab*）のような古典辞書でも、「…はペルシア語起源のムアッラブでダヒールである（…*fārisī muʿarrab wa huwa dākhīl*）」のように用語を混用した記述が散見される。

また、古典文法学の大成者であるスィーバワイヒ（177/796 年没）は、その集大成的な文典『キターブ』の中で、外来語あるいは借用語について、「アジャムな語彙からアラブ化された語彙（*mā uʾriba min al-aʿjamiya*）」³と「ペルシア語からの交替現象の必要性（*ittirād al-ibdāl fī al-fārisīya*）」という章を設け、特に形態的側面から詳論している。アジャムとは「非アラブ（人）」の総称であり、限定的な用法としては「ペルシア（人）」を指す [Suleiman 2003: 58]。スィーバワイヒの章題も、語彙の外来性よりはペルシア語を中心とする「アラブ対非アラブ」を意識したものではあるが⁴、扱う範囲は、ペルシア語の語彙に限ることなく、「外来の語彙」全般の形態と表記の規則性を記述している。また、タアリーブ論としては先駆的に、アラビア語本来の語形に当てはまるか否かで「外来の語彙」を分類している点も注

² 国語学、特に語彙史における外来語研究には膨大な研究の蓄積がある。ここでは「外来語」と「借用語」の定義の相違には深入りせず、外来語（*foreign word*）とは「外国語の音とアクセントをほぼそのままの形で取り入れたもの」、借用語（*loan word*）とは、「自国語の音韻体系に合うように変形して取り入れたもの」 [田中: 1988] という一般的な定義に従う。

³ 一般に「アラブ化すること」を意味する「タアリーブ」という用語は、動詞派生形2型の *ʾarraba* のマスダルである。しかし、スィーバワイヒは4型の *aʾraba* を用いており、これに則れば「アラブ化すること」は、派生形4型マスダルで「イウラーブ」になる。このイウラーブという用語は文法学では、作用の結果としての語尾の変化（格変化による語末母音の動き）を表すものとして現在まで使用されている。

⁴ この点は、文法学のとくに「サルフ」（形態論）の中で、純粋なアラビア語の語彙が3段変化に格変化するのに対して、外来語は2段変化であることの根拠にも関係する。例えば、古典期における外来語論を著した15世紀の文法家イブン・カマル（1533/940 年没）は、「アラビア語の語彙が、3段変化であることの理由は、アジャムの語彙よりも優越性を有していることによる」と述べている [Ibn Kamāl 1991: 41]。

目される。その分類は大きく以下の4つである [Sībawayhi 1999: vol.4, 446-447]。

1. アラビア語の語形パターンに則した形に変えた語彙
hijra' (獵犬) のパターン: dirham (ディルハム、銀貨 [通貨単位])
salhab (背丈のある人・馬) のパターン: bahraj (偽造硬貨)
dīmās (牢獄) のパターン: dīnār (ディーナール、金貨 [通貨単位])
i'sār (嵐) のパターン: ishāq (イスハーク [人名])
2. 元型を変えるが、アラビア語の語形パターンに則さない語彙
firnid (剣の裝飾)、baqqam (木)、jurbuz (欺く者)、ājurr (熟したイチジク)
3. 元型のまま、アラビア語の語形パターンに則した形の語彙
khurram (小麦粉の一種)、kurkum (ウコンの一種)
4. 元型のままの語彙
khurāsān (ホラーサーン [地名])

しかし、先述の [西尾 2006: 106] に見られた「ムアッラブ」や「ダヒール」といった外来語の分類は、少なくとも文法学が成立する8世紀のスィーバワイヒの記述には見られない。スィーバワイヒが文法記述の対象とした語彙は、アラビア語の語形パターン (ワズン **wazn**) との整合性を問わず、結局は「アジャム (外来) 起源の語をいずれかの方法でアラブ化した語」である。すなわちこの段階では、アラビア語本来のパターンに適合しているか否かは、外来語の形態の分類に過ぎず、「アラブ化された語彙」すなわち「ムアッラブ」であるか否かを規定する決定的な基準とはなっていなかった。

いかなる語を「ムアッラブ」とするかという外来語彙のアラブ化の問題に大きな展開をもたらした人物が、12世紀のジャワーリーキー (539/1144 年没) である。それまで外来語は、啓典解釈学や文法学、さらにサアラビー (427/1035 年没) のように語彙論などを専門に扱う言語研究 (fiqh al-lugha) といった領域で副次的に、時には複合的な分野で論じられていた。ジャワーリーキーは、この外来語に関する議論を専門分野として特化し、その後のタアリーブ論の展開の新たな基礎を打ち立てた。その代表的な著作が、『ムアッラブ』である。

ジャワーリーキーはその著の中で、クルアーンやハディース・古詩の語彙を中心に 838 語の外来語を扱い、語源と例証による解説を行っている。外来語に相当する用語は、「ムアッラブ」「ダヒール」の他、「アジャムの語」、「ペルシア語起源のムアッラブ」など様ではない。ただし、ここでも「アジャム」という語が必ずしもペルシアだけを意味する語ではなく、一般に非アラブの語彙としても使われている点に注意する必要がある。例えば、dīnār (金貨) はギリシア語由来であるが、「アジャムの語」と説明されている [al-Jawālīqī 2002: 139]。一見すると、外来語収集を目的としているかのように映るジャワーリーキーの真の目的は、クルアーンや古典語の外来性を主張しようということでは決してなかった。また、アラビア語が外来の影響を強く受けていることを論証することでもなかった。その目的は、当書の前書きにある「これらの語彙は外来起源ではあるが、クルアーン・ハディース・古詩で用いられ、純粋なアラブ人が発話したことで、すでにアラビア語になっている」という点に凝縮されている [Yūsuf 2002:

44]。ジャワーリーキーは、外来の語彙であっても、純粋なアラブ（遊牧民）の使用は実際にあったのか、また例証ではいかなる形態でアラビア語化していたのかに着目し、アラビア語化した語「ムアッラブ」のアラブ性を精査に吟味している。

例えば、イラクの地名 *ḥulwān*（フルワーン）は、外来語彙による地名としながらも、「アラブ人（遊牧民）がこの語彙を発話していた」[*al-Jawālīqī* 2002: 121] と説明され、キリスト教の祭日の一つである *al-sullāq*（昇天祭）についても外来語としながらも「アラブ人が実際に知っていた語彙」[*al-Jawālīqī* 2002: 196] という記述が続く。*al-muṣṭakā* については、ラテン語由来とし、「ダヒール」とした後で、「アラブ人は発話していた」とイジュリー（21/641 年没）のラジャズ詩を例証として引用している[*al-Jawālīqī* 2002: 320]。また一見すると、*siqintār*（有能な批評家）のように本来アラビア語にはないパターンの語彙であっても「アラブ人が使っており、*siqtirī* とも言われた」[*al-Jawālīqī* 2002: 196] や、外来語とされる *saqar*（業火）についても「語源はアラビア語とする説もあり」[*al-Jawālīqī* 2002: 198] と、アラブやアラビア語の純粋性を強調する記述が、全体を通じて目立つ。ジャワーリーキーは、たとえば語源が「非アラブ的な語彙」であっても、純粋なアラブ人が使用していたという点を鑑み、あるいは彼らによって正統なアラビア語に取り入れられる、すなわち「タアリーブ」（アラブ化）という過程を経たことにより、この種の「ムアッラブ」（アラブ化した外来の語彙）を「純粋なアラビア語」と位置づけている⁵。

一方、ジャワーリーキーの『ムアッラブ』には「ムワッラド (*muwallad*)」という用語も登場する。例えば、*ḥubb*（水瓶）⁶は、「ペルシア語起源のアラビア語化した語であるが、ムワッラドである」[*al-Jawālīqī* 2002: 120] と説明している。他にも、*al-māsh*（豆の一種）、*al-ḥimmaṣ*（無花果の一種）などの語彙を「ムワッラド」としている[*al-Jawālīqī* 2002: 119, 328]。一般に「ムワッラド」とは、「純粋なアラブ人（遊牧民）ではない人々」[*al-Rāzī* n.d.: 730] を意味し、特に、イスラームの大征服によってアラビア語を受け入れアラブ化した人々、あるいはアジャムとの接触により「アラブの純粋性」を欠いた後代の人々⁷と、その層による語彙を指す。語彙論では、「ムワッラド」は「例証には用いられないムワッラドの人々によって新たに造成された語彙」[*al-Suyūṭī* 1998a: vol.1, 242] と定義される。つまり、「ムワッラド」の時代以降は、言語的にも社会的にもアラブには本来ない外来の要素が混入しており、純粋なアラビア語としての規範性に欠く、ということの意味している。

ジャワーリーキーの外来語論では、外来か否かはアラビア語の正統性を判断する基準とはならず、純粋なアラブ人による使用語彙か否か、つまり純粋なアラブ人の時代の語彙か否か、という判断基準が大きく関わっている。ここに、言語的に「正則」（ファスィーフ *faṣīḥ*）であるか否かを判断する時代区分

⁵ 同様の主張は、例えば 10 世紀の文法家イブン・ジンニー（392/1002 年没）も見られる。イブン・ジンニーは外来語について「アラブのことばから類推され（生成され）た語彙はアラブのことばの一部である」[*Murād* 1985: 33] と述べている。

⁶ ハヴァの辞書 [Hava 1921: 108] では、*ḥibb*（ペルシア語起源）としているが、ジャワーリーキーでは、第 1 語根の母音は「ウ」となっている。

⁷ 湯川はイブン・ハルドゥーンの言う「ムワッラド」について、IE²の説明から、「イスラームとアラビア語を受け入れた被征服地の人々のこと」[湯川 2008: 120] とし、「初期の混血民」という訳語を充てている。しかし「ムワッラド」は、イスラームの大征服による被征服地の民とは限らず、アラブの地であってもアジャムとの接触が生じた世代以降のアラブ人（遊牧民）も「ムワッラド」と呼ばれる [al-Tahānawī 1996: vol.2, 1671]。「ムワッラド」の範囲と時代をめぐる問題は次節で詳しく論じる。

が、「純粋なアラブ人」とはいつの時代の誰かという問題と共に、タアリーブ論にとって決定的に重要な概念として登場する。この時代は文法学や文学史において、「例証の時代（‘uṣūr al-iḥtijāj）」と呼ばれる。「純粋なアラブ人」の時代と、その言語データ（例証）の有無を基準とする語彙の選別法は、現代のタアリーブ論と語彙造成においても非常に重要な論点となっていく。

1.3. 「例証の時代」と新語の認定

外来語論も含め古典期の言語研究を包括的にまとめたスューティー（911/1505 年没）は、『ムズヒル』で「例証には用いられないムワッラドの人々によって新たに造成された語彙」[al-Suyūṭī 1998a: 242]と定義したが、この「例証」として採用される時代か否かの時間的範囲が、文法学・辞書論・そしてタアリーブ論を含む語彙論において決定的に重要となってくる。池田[1968]やゴルトツィーハーの文法文学史研究[1994: 36]が明らかにしているように、初期の文法家たちは、文法学の規範化の過程において、純粋なアラビア語の語彙や表現を求め、アラブ人（遊牧民）をインフォーマントとした調査の旅を行った。その臨地調査を通じ、言語データの収集・記録が徹底的に行われた⁸。ジャーヒリーヤ詩とクルアーンに加え、この言語データが、文法学のみならず、文学や啓典解釈学における「例証」（シャワーヒド shawāhid）となっている⁹。

言語伝承を正統な例証とするその時間的際限は、遊牧民の場合はヒジュラ暦 4 世紀半ば、定住民の場合は 2 世紀までと、文法学（特に文法法源論 [uṣūl al-naḥw]）で定められている [ʿId 1988: 181,182; al-Afghānī 1987: 19]。特に、「例証の時代」の終焉、すなわち純粋なアラブの時代と、その後の「ムワッラド」の時代との境は重要であり、例証の詩人がその境界線となる。諸説はあるが、一般に「例証の時代」の終焉はイブラーヒーム・イブン・ハルマ（176/792 年没）で、「ムワッラド」の始まりはバッシェール・イブン・ブルド（167/784 年没）とされている [al-Suyūṭī 1998b: 42]¹⁰。

古典文法において、ある文法現象の説明や根拠として引かれる古詩などの用例は、この「例証の時代」に収集された語彙や表現である。辞書学についても、古典期の辞書における語彙・用例はこの「例証の時代」の終焉期までに限定されている。つまり、伝統的なアラビア語学では、「例証の時代」における用法こそが正用法であり、「ムワッラド」以降の用例は、何らかの外来要素が混ざっている可能性があるため正則用法としては採用しない。この点が、現代になり新たな用語や新語を生産する際の決定的な争点となっていく。

これまで特に日本のアラビア語研究では、この「例証の時代」については論じられることがなかったが、「例証の時代」という時代規定は、古典期のみならず現代においても、ある文法現象や語彙について正則的か否かを判断する際にしばしば登場する重要概念となっている。オスマン帝国が崩壊し、現代

⁸ 例えば、部族に関しては主として 6 部族（タミーム、カイス、アサド、フザイル、タイイ、キナーナ）のアラビア語が最も正則とされ、ハリールやキサーイーなどの言語学者によるデータ収集の対象となった [al-ʿUṣaymī 2002: 686, 684]。

⁹ この文法学の規範化の作業は「例証の伝播」(naql al-luḡa: transmission of the date) とも呼ばれる [Bohas et al. 1990: 18]。

¹⁰ スューティーによる文法法源論の代表的著作『イクティラーフ』の「例証の時代」に関する記述による。その記述によれば、サアラビー（427/1035 年没）が「イブラーヒーム・イブン・ハルマが詩の例証の終焉である」というアスマイー（213/828 年没）の説を伝えたとされている [al-Suyūṭī 1998b: 42]。アラブの伝統文法理論を論じたスライマーン [Suleiman 1999: 20] や、『アラブ文学百科辞典』[Meisami et al. 1998: vol.1,188] では、ズー・ルンマ（117/735 年没）を「例証の時代」の最後の詩人としている。

アラブ世界が形成される過程の最も重要な要素は、民族語としてのアラビア語であった¹¹。これはイスラームの普遍語としてのアラビア語ではなく、「アラブ人」とは何かという問いがなされる 19 世紀以降、アラブ諸国が独立し、憲法によってアラビア語が公用語化していく中で、形成されていった民族語としての現代アラビア語である¹²。イスラームの普遍語としてのアラビア語は、「例証の時代」による用法の線引きが極めて明確になされている。ある文法現象や語形態に関して、どの文典や辞書でも根拠となる例文・用例がほぼ同様に引かれているのは、そのためである。

現代に入り、新聞・雑誌等の印刷媒体と教育の著しい発展は、それまでのアラビア語の機能を著しく変化させた。それまでは、語義解釈のための文法学や古典文献の中で、一部の知識層やウラマーのみが扱う、ある種の特権的な地位にあったアラビア語が、実際に人々の筆によって書かれ、様々な媒体に発表されるという実用的なアラビア語となってアラブ社会に再生した。また 19 世紀以降は、西洋との邂逅やナフダ（文芸復興）の興隆によって、新概念や新たな文化的語彙をアラビア語で生産する時代でもあった。その際に議論として浮上したのは、これらの新しい用語や造語はアラビア語の正当性を得ることができるのか、正統なアラビア語の語彙なのか、という問いであった。新語・造語や現代的な語法を正則と見なすか否かは、「例証の時代」への新たな探求の作業とも言える。古典期の普遍語としてのアラビア語と、軍事や近代科学・技術の分野の用語の生産を急務とした現代アラビア語との規範論における決定的な相違の一つは、この「例証の時代の終焉」の再解釈にあった。

II. アラブ文芸復興と学術用語の創出

19 世紀は、アッバース朝前期に匹敵する翻訳の時代とも呼ばれる。アッバース朝時代には、フナイン・イブン・イスハーク（260/873 年没）を筆頭に、ネストリウス派のキリスト教徒やサービア教徒など、シリア語やギリシア語に長けた非ムスリムの翻訳家の貢献もあり、哲学・論理学・天文学・医学・薬学などの外来の文献が大量にアラビア語に翻訳された。それゆえ、翻訳論や文明論ではアッバース朝時代を「翻訳の黄金期」と呼び、19 世紀の翻訳活動は時に、このアラブ・イスラーム史におけるかつてのこの黄金期を理想として推し進められた。アッバース朝時代と同様、19 世紀は、他文明圏との接触と交流によって、新たな概念や用語がアラビア語に訳され、新たな学術用語が形成される時代である。

しかし両者の決定的な違いは、アッバース朝期の翻訳家の多くが、シリア語やペルシア語を母語とする外来の学者であったのに対し、ナフダ期の翻訳者たちはアラビア語を母語とする知識人であった。また、前者がギリシアを中心とする外来学問の積極的な摂取に終始していたのに対し、後者はアラブ民族意識の高揚と西欧列強による植民地支配への対抗意識の顕在化に伴い、アラブとしての自文化の保持を一層強調していった。アラブの近代化とナフダ期を主導した知識人たちは、外来の語彙をいかにアラビア語化した形で翻訳し、自分たちのことばによって社会を啓蒙していったのであろうか。次に、19 世紀のナフダ期を代表する知識人タフターウィー、シドヤーク、イブラーヒーム・ヤーズィーギーによる知

¹¹ オスマン帝国下におけるアラビア語の使用状況と、民族語としてのアラビア語が形成される過程については〔竹田 2009〕で論じた。

¹² アラブ諸国の憲法が規定する公用語・国語としてのアラビア語については〔竹田 2009〕を参照のこと。

的営為を跡付けながら、ナフダ期のタアリーブ論の展開を探っていく。

2.1. タフターウィーと現代タアリーブ論の草創期

ナポレオンのエジプト遠征（1798～1801）は西洋との邂逅によるエジプトの近代化の始まりを象徴する出来事であった。仏軍撤退の直後に成立したムハンマド・アリー朝（1805～1953）は、先進的であった西洋の文明と新技術を積極的に導入し、特にブーラク出版所の設立（1821）に見られるような学術活動の奨励や、繊維工場の建設などの工業活動の推進、さらに徴兵制の改革や軍事力の強化によって国の近代化を推し進めた。また、西洋の学問や軍事技術を積極的に取り入れるため、留学生の派遣や翻訳活動にも力を入れた。近代化政策はリベラルな西洋化による啓蒙を志向する一方で、その主導者となった知識人たちは、西洋の学問に見られる新概念や学術用語をアラビア語化することに尽力した。

当時アズハル学院のウラマーの一人であったタフターウィー（1801-73）は、ムハンマド・アリーの近代化政策の一端を担い、1826年から31年までの5年間、フランスに留学した。フランス滞在中、彼はド・サスィなど東洋学者との交流や現地の書物などを通じ、特にモンテスキューなどのフランス啓蒙主義思想や女性の教育を含めた近代教育論に強い関心を持った。その現地経験から得た知見や西洋文明への評価は、タフターウィー自身が「パリ滞在記」に相当する『パリ概要における金の精錬』（*Takhlīṣ al-libriz ilā Talkhīṣ Bārīz*）の中でアラビア語によって精彩に記述した。また、帰国後はムハンマド・アリーが1835年に開設した翻訳学校（*madrassa al-alsun*）の館長を務め、フランス法典の翻訳を筆頭に西洋の思想・文化・文学など計114の翻訳に従事するなど [Hegazi 1994: 404]、エジプトの啓蒙と文芸復興に精力を注いだ。

一方で、外来の文献や西洋思想の翻訳は、科学・技術分野のみならず、「テレビ」や「電話」など、アラビア語で「文明語彙（*alfāz al-ḥaḍāra*）¹³」と呼ばれる生活一般の語彙についても、いかにアラビア語に置き換えるかという問題に直面した。前述の「パリ滞在記」には、学術用語の他にも、*bayt al-ṣiḥḥa*（病院：現代では *mustashfan*）、*shawka*（フォーク）のようなアラビア語化した新語・造語が散見できる。また1834年に発表した『豪華な腕輪』（*Qalā'id al-Mafākhir fī Gharīb 'Awā'id al-Awā'il wa al-Awākhir*）では、新しい生活語彙が収録され解説が加えられており、ナフダ期の語彙研究における貴重な資料となっている [Ghunaym 1989: 133]。

タフターウィーは、西洋文明を積極的に評価する一方で、常にアラビア語の価値と造語力に絶対の信頼を寄せていた。アラビア語がイスラームの普遍語であることに鑑みると、そこには、イスラームの価値を前提としながら、西洋文明の美德を説くタフターウィーの特徴 [小杉 2006: 195] が看取できる。それゆえ、アラビア語には本来ない語彙も、*ahl al-jūrṇāl*（編集者）、*akdama al-ḥikma*（医科大学）のように、外来語とアラビア語のイダーファ構造（属格連結）などを駆使し、見事にアラビア語で翻訳して見せた [Khalīl 1985: 534]。また、現在「ワークショップ」を意味する現代語として定着している *warsha*¹⁴ も、タフターウィーが使用していた翻訳語である [Heyworth-Dunne 1940: 411] タフターウィーの語彙

¹³ 字義は「文明語彙」だが、対象は日常生活の語彙が多く、「生活語彙」の方が適訳であろう。よって、以下「生活語彙」を使う。例えば、エジプトの著名作家マフムード・タイムール（1894-1973）は、この種の語彙を集め『生活語彙辞典』 [Taymūr 1961] を編纂している。

¹⁴ 英語の *workshop* からの翻訳語 [Heyworth-Dunne 1940: 411]

研究の先駆であるバダウィーは、「タフターウィーのタアリーブの方法論はじつに精緻で、語彙創出における彼の貢献は計り知れない」[Badawī 1950: 56] と高く評価している。

タフターウィーのタアリーブ(アラビア語化)支持の傾向は、自身が 1842 年から 50 年までの 8 年間、編集を務めた『官報』(*al-Waqā'ī' al-Miṣrīya*) にも顕著に現れている。まず彼は、発行当初よりトルコ語との二ヶ国語で書かれていた第一面をアラビア語一言語のみに変更した [Khaṭīb 1985: 490]。さらに「序論 (tamhīd)」という欄を新設し、積極的に西洋の政治概念をアラビア語で紹介した。「憲法」(charṭe → *sharṭa* : 現代では *dustūr*)、「祖国」(*waṭan*)、「予算」(*mīzānīya*) といった用語は、彼によるムアッラブ(アラビア語化させた語彙)の代表例である [Khaṭīb 1985: 492]。

一方、翻訳語を創出していく過程でタフターウィーは、「学術用語のアラビア語化や、新語の創出は、個人の努力だけでは不十分であるゆえ、共同作業が不可欠」との見解を持つに至っている [Ziyāda 1978: 265]。『官報』の編集において、後述のシドヤークを筆頭にアラビア語の翻訳に卓越した人物を抜擢したのはそのような考えに基づく。タフターウィーによるアラビア語の近代化は、西洋の学問や用語をアラビア語に翻訳するという、アッバース朝以来の「翻訳の時代」に推し進められ、いかにアラビア語の語彙に基づき新語を創出するかという現代タアリーブ論の草創期を形成した。

2.2. シドヤークとヤーズィジーによるタアリーブ論

一方、19 世紀中葉のシリア(歴史的シリア)では、キリスト教徒の知識人を中心に文芸復興(ナフダ)が勃興し、アラブ人の共通遺産としての古典アラビア語とアラブ文化への回帰の機運が高まりを見せていた。その担い手となった文人たちは、古典アラビア語の規則を保持しつつも、現代に即した語彙や文体を模索し、自ら西洋の学術用語をアラビア語化し、独創性豊かな新語や造語を数多生み出した。

タフターウィーを含め、ナフダ期の知識人に共通するのは、外来の思想に加え自分たちの考えをアラビア語で発信する場としての、その表現媒体を自ら開拓していったことである。その媒体は雑誌であり、新聞であり、また近代技術の賜物である刊本の形態をとった。19 世紀のシドヤーク、ヤーズィジー、彼らの同時代人であるサッルーフ(1852-1927)、ザイダーン(1861-1914)など、ナフダを主導する文人たちは、自らが編集する学芸雑誌の中で、西洋の新しい概念や思想を、試行錯誤しながら実際にアラビア語で表現することを試みた¹⁵。オスマン帝国支配下の中で長らく伝統墨守に終始し硬直化に陥っていたアラビア語は、特定の階層のみが操ることのできる宗教的言語から、読み書きされる近代語として再び息を吹き返し、文人たちの筆の力によってその生産性と活力を高めていった。

レバノン生まれのシドヤーク(1804-1887)は、ヨーロッパやマルタ、エジプト、イスタンブルを遍歴し、各地でそのアラビア語への造詣の深さを評価され、聖書を初めとする翻訳や雑誌・新聞の編集、そしてアラビア語教育に携わり、次々とアラビア語による知的活動を展開した。1828 年から 4 年間滞在したカイロでは、タフターウィーとともに『官報』の編集に従事した。さらにシドヤークの名声を世に広めたのは、1860 年創刊の『ジャワーイブ』(*al-Jawā'ib* : 返信・通信の意味)である。文学・政治・

¹⁵ この時期はカイロを中心に、次のような知識人によって多くの雑誌・新聞が刊行された。例えば、タクラール兄弟『アフラム』(1876)、ジュルジー・ザイダーン『ヒラル』(1892)、イブラーヒーム・ヤーズィジー『バヤーン』(1897)、『ディヤー』(1898)、ラシード・リダー『マナール』(1898)、ファーリス・ナムル『ムカッタム』(1889)、ヤアクーブ・サッルーフ『ムクタタフ』(1885) など。

思想といった多ジャンルの論考を掲載し、19 世紀のアラビア語による文芸活動のシンボリック的存在となり、イスラーム世界のみならず西欧の知識人をも魅了した。シドヤークはこの『ジャワーイブ』に 1870 年「アラビア語の美点」(maḥāsin al-lugha) という論考を発表し、タアリーブ論について、次のように述べている。

「近代の科学技術用語をアラビア語化することが、何ゆえに恥なのか。恥であることは、われわれの言語の形態（語形パターン）によって造語可能であるにもかかわらず、外国語をそのまま借用していることである」。[‘Abd al-‘Azīz 1990: 172]

西欧文明の先進的な科学技術を評価する一方で、シドヤークはアラビア語が元来持つその造語力に絶対の自信を持っていた。この点は、西洋を実体験として自らの著作によって著したことも含め¹⁶、イスラーム知識人としてのタフターウィーに通じるところがある。例えば、シドヤークは、*jarīda*（新聞）、*mu’tamar*（シンポジウム）、*ḥāfila*（バス）、*mintād*（気球）、*maṭ’am*（レストラン）、*al-silk al-barqī*（電報）など、アラビア語本来の語形パターンによって多くの新語を創出した [Zāzā 1990: 69]。また、当時流布していた外来語に対しては、特に、場所名詞・器具名詞に基づくアラビア語化を訴えた [Hegazi 1994: 408; al-Zarkān 1988: 344]。例を挙げると、次のようである（後者がシドヤークの提案）。

fabrīqa, kārkhāna → *ma’mal/maṣna’*（工場：造る場所）

bīmāristān → *mustashfan*（病院：治癒する場所）

dīwān → *ma’mar*（庁：命令する場所）

aṣṭurlāb → *manẓar*（アストロラーベ：観測する道具）

一方、当時人口に膾炙していたフィールーザーバーディー（817/1415 年没）による辞書『大海』（*al-Qāmūs al-Muḥīṭ*）を批判し¹⁷、現代人にとって引き易いような語頭子音順による配列と、語彙の明瞭な定義を提唱した [Khalīl 1985: 539]。さらにシドヤークは、「現代文明の用語にも対応可能な造語法の革新により、アラビア語は現代語として復興するべき」とし、タアリーブ論の中でも特に、アラビア語学の原点であるイシュティカーク論（語根とその配列・派生を専門とする分野）の研究から、3 語根のみならず 2 語根、4 語根による造語法と混成語（ナハト）¹⁸の研究を進めた [al-Maṭwī 1989: 260]。そして、彼の形態論と語彙論研究は、『アッサーク・アラッサーク』¹⁹『スィッル・ラヤール』といった辞書の編纂へと集大成する。

シドヤークの貢献は、現代文明に則した新語を多く生産したことに加え、「例証の時代」の後の詩人など、前章で論じた「ムワッラド」世代の文学作品からの用例を辞書に採用するという、旧来の辞書学

¹⁶ 西欧での経験を『ヨーロッパ技術の秘訣の開示』（*Kashf al-Mukhabba’ ‘an Funūn Ūrubā*）、マルタでの体験を『マルタの状況を知る手段』（*al-Wāsiṭa fī Ma’rifa Aḥwāl Mālta*）として 1867 年に刊行している。

¹⁷ 古典辞書の標準であった語末子音順による配列。この辞書にはムワッラド語彙が非常に少ないことが指摘されている。マクディスィーのムワッラド語研究 [MLAD 1965: 180] によれば、カイロアラビア語アカデミー発行の『中辞典』（*al-Mu’jam al-Wasīṭ*）におけるムワッラド語彙は 550 語、ハンス・ヴェーアの辞書では約 520 語としている。これらの辞書のに対し、『大海』のムワッラド語彙は 60 語彙のみで、その差は歴然としている。

¹⁸ 混成語（ナハト）とは、‘*abd* と *shams* から出来る ‘*abshamī*（アブドゥッシャムス族の人）という語彙のように、2 語の一要素を抽出し、混成することで新たに形成される語彙のこと。「かばん語」とも呼ばれる。この造語法については第 3 章で詳論する。

¹⁹ サーク（*sāq*）とは「脚」を意味する。前置詞こそ *bi* と ‘*alā* で異なるが、クルアーンの「一つの脚は他方の脚に絡まり」（Q.75: 29）を援用して命名したと考えられる。

では許されなかった大胆な試みをしたことである。例えば古典辞書では、ジャリール（111/729 年没）、ファラズダク（110/728 年没）、アフタル（92/710 年没）、バッシヤール・イブン・ブルド（167/784 年没）、アブー・ヌワース（198/813 年没）、アブー・タンマーム（232/845 年没）、ブフトゥリー（284/897 年没）、ムタナッビー（354/965 年没）といった、現代であればアラブ文学を代表する文人らも、「例証の時代」より後世の者、すなわち「ムワッラド」世代として、その語彙は辞書の正統な用例としては採用されることはなかった。しかしシドヤークは、伝統的ウラマーによる「ムワッラド」論に基づく語彙制限を「彼らの原理は、クルアーンやハディース理解のためのみである」[al-Zarkān 1988: 186] と批判し、ムワッラド語彙の形態的・文法的正則性を主張するとともに、自らの辞書の用例に取り入れた。このシドヤークの試みはムワッラド語彙の正統性をめぐる議論となって、その後の現代タアリーブ論にも大きな影響を与えることになる。

「目覚めよアラブ…」で始まるナフダ詩を創作し、アラブ民族の覚醒を訴えたイブラーヒーム・ヤーズィジー（1847-1906）もまた、タアリーブ論に非常に高い関心を示した。彼が編集する雑誌『ディヤー』では、タアリーブ論やムワッラド問題など近代化とアラビア語に関する論考を多数発表し、「近代化に伴い登場した新たな文化語彙や科学技術用語は、古典アラビア語の豊富な語彙によって対応可能」との立場を明確に示した [Khaṣṣ 1985: 551]。1899 年から 1900 年にかけて連載した「タアリーブ」と題する論考 [al-Yāzījī 1993: 199-212] には、当時流布している中で推奨できる語彙やヤーズィジー独自の考案例が挙げられており、当時の語彙状況を知る上で大変示唆に富む資料となっている²⁰。

諸例を見ると、jināḥ（バルコニー）、ḥasā'（スープ）や ḥūdhī（騎手→運転手）、shihna（騎兵隊→警察）のような古典語彙を現代語に応用した例や²¹、語根概念を基に majalla（雑誌）、maqṣaf（ビュッフェ）、durrāja（自転車：現代では darrāja）、ma'sā（悲劇）のように場所名詞・器具名詞のパターンを駆使した新語も多く観察される。中には現代にまで定着している語彙も多く、近代アラビア語の草創期における彼の貢献は大きく、ここにヤーズィジーを「もっとも偉大な近代語彙の草案者」[Sabā 1992: 32] と評する所以と言えよう。

ヤーズィジーのタアリーブ論の特徴は、古典アラビア語の価値とその正則性を尊重する一方で、現代語としての実用性に最大限の関心を払ったことにある。主著『新聞のことば』（*Lughā al-Jarā'id*）の前書きでヤーズィジーは、ジャーナリストや知識人のペダンチックかつ不明瞭な語彙使用を指摘し、「特別な階層の人にしか分からない用語ばかりで、理解するための特別な辞書が必要なほどである。…適切な用語と用法に関する指針が必要」[al-Yāzījī 1974: 2] と主張した。さらにこの批判に留まることなく、自ら、知識層が使うべくマニュアルとしての用語集（同義語辞典）『先達者の恩恵』（*Naj'a al-Rā'id*）を 1904 年に上梓した²²。社会の啓蒙にメディア媒体が有効であるがゆえに、その言語使用の整備が重要かつ急務と考えたのである。

アラビア語を機軸とするアラブ民族意識の覚醒を目指したヤーズィジーにとって、不要なまでの外国

²⁰ この論考は、フリーによるヤーズィジーの『言語論集』[al-Yāzījī 1993: 199-212] に再録されている。

²¹ *jarīda*（新聞）はヤーズィジー独自の考案による語彙ではないが、当時流布し始めた語彙の中で推奨できるものとして、挙げられている。ハヴァの辞書 [Hava 1921: 84] では、シリア方言の印がつけられており、編纂当時はまだ正則語として定着していなかったことを示している。

²² 初版は 1904 年であるが、1970 年に二版、1980 年に三版として「レバノン出版社」から刊行されており、ヤーズィジーの知的貢献に対する人々の関心が再び高まっていることが伺える。

語の多用と、新語や専門用語の不統一は、解決しなければならない課題の一つであった。先述の論考「タアリーブ」の中で、何百、何千と流入する外来語の氾濫について、「このままでは、アラビア語の語彙の大部分が外国語になってしまう」と汽笛を鳴らすと同時に、「現代人の語彙に関する実態調査とその包括的な整備を担い、アラビア語の復興に貢献を目指す言語アカデミーが必要である」[al-Yāzījī 1993: 199-212] と共同作業の必要性を訴えた。

ナフダの先導者らによるアラビア語を基盤とする知的生産の活性化は、アラビア語は外来の思想や科学・技術、文明を翻訳する力を元来有している、というアラビア語に対する自信の復活でもあった。このような 19 世紀の近代化の流れと文芸復興の隆盛は、オスマン帝国の支配下で長らく低迷し活力を失っていたアラビア語の規範性の復興と、アラビア語を機軸とする現代アラブの民族意識の形成につながる重要な契機となった [竹田 2009]。一方で、表現媒体としての雑誌・新聞が相次いで刊行される中、知識人たちは、積極的に外来語をアラビア語化し、新語や専門用語として実際に使用した。民族語としての共通語の形成には、語彙の整備と統一が不可欠であり、ここに知的議論の共通の場としての言語アカデミーの必要性が説かれるようになった。

Ⅲ. 学術用語とアラビア語アカデミー

3.1. アラビア語アカデミーの設立とタアリーブ論

前節で論じたように、19 世紀という時代は、文芸復興を先導する知識人たちが積極的に外来語をアラビア語化し、雑誌などの印刷媒体を通じてその新しい語彙や表現を世に問うた時期と捉えることができよう。この近代アラビア語の草創期から、続く 20 世紀はじめには、相次いで学術用語の編纂・刊行が始まっている。その背景には、『ムクタタフ』や『ムハンディス』、『学びの園』(Rawḍa al-Madāris)²³などの医学・教育・政治・科学分野の学術雑誌の出版が隆盛し、各分野の専門用語が急速に増加したことが考えられる。この時期の著名な専門用語辞典としては、ムハンマド・シャラフの『医学用語辞典』(1929) [Ghunaym 1990:134]、アミーン・マアルーフの『動物辞典』(1932) [al-Qazzāz 1979: 42]、アフマド・イーサー『植物辞典』(1931)、後にシリアのアカデミーの専門用語の制定における中心人物となるシハービーの『農学辞典』(1943) などが挙げられる。また、特筆すべきは、この 19 世紀末葉にダマスカス大学の医学部はアラビア語による教育を実践しており [Khaṭīb 1985: 521]、この経験は現代でも「理系分野の教育はアラビア語で実行可能」という議論の拠り所としてしばしば登場する。

先述のように、個人の知的活動としてのタアリーブ運動が活発に行われる中、アラビア語アカデミーの提唱がなされるようになった。その嚆矢はシドヤークであり、1860 年『ジャワーイブ』の中で、近代科学の発展に対応する語彙の整備のための言語アカデミー(majma' lughawī)設置の必要性を論じた。その後、ヤーズィジが続き、さらにアブドゥ (1905 年没)、リダー (1935 年没) などのイスラーム知識人も、『マナール』[Riḍā 1907: 448] や書簡 [ʿAbduḥ 1993: 189] の中で、挙って言語アカデミーの設立を訴えた。特にエジプトでは、アラービー革命の失敗 (1882) が、教育の言語をアラビア語から

²³ タフターウィーが 1870 年に編集・刊行した教育雑誌。

英語へ変えるという危機的状況を生み出していた。さらに、19世紀末葉からは、近代化の名の下に、内実は植民地政策の一環としての「口語推進運動」や「アラビア文字排斥運動」が西欧出身の東洋学者らを中心に展開された。これに対し、アズハル学院を中心とするイスラーム教育機関やイスラーム知識人らは、この趨勢をイスラームの普遍語への侵略、フスハーの規範性の破壊と捉えた。

このような時代を背景に、アラブ世界初の言語アカデミーが1892年エジプトに登場した。正式名称を「タアリーブ制定のための言語アカデミー」とするこの機関は、アカデミー長サイイド・タウフィーク・バクリーの名前から、通称「バクリー・アカデミー」と呼ばれた。メンバーには、アブドゥやムハンマド・シンキーティー(1878-1944)、ヒフニー・ナースィフ(1899-1969)といった、イスラーム知識人や教育者を中心に50名から構成され、特に流布している外国語のアラビア語化について議論を重ねた[al-Jumayī 1983: 15]。アカデミーは、以下はアカデミーが提示した外来語言い換え案の一例である[MLAQ 1953: vol.7, 124]。

tilifūn (電話) → misarra

burāfū (素晴らしい) → marḥaban

bunjūr (おはよう) → ‘im ṣabāḥan

ṣālūn (サロン) → bahw

実用性に乏しい観が否めない提案もあったが、この時期に外来語のアラビア語化を議論する場が存在していたことは注目に値する²⁴。また、1907年には、ヒフニー・ナースィフが中心となって、イスラーム教育の近代化を担ったカイロ大学ダールルウルーム(師範学校)の教授陣により、口語使用や外来語の排除によるアラビア語の純粋化を目的とした「ダールルウルーム委員会」を立ち上げた[MLAQ 1991: vol.68, 188]。当時の言語状況は、ダールルウルームのスローガンとなっている、アブドゥの言葉「アラビア語はいたる所で死に瀕している。しかし、ダールルウルームでこそ生き続ける」が雄弁に語っている。

試行的なアカデミー設置が続く中²⁵、言語社会的な背景と時代の要請に応える形で、20世紀初頭には相次いでアラブ諸国に言語・学術アカデミーが設立された。1919年シリアにムハンマド・クルド・アリー(1867-1953)を長とする「学術アカデミー」²⁶、1932年には、エジプトに「王立アラビア語アカデミー」²⁷、そして1947年にイラクに「学術アカデミー」が登場する。20世紀中葉までは、主としてこの3アカデミーが中心となって、文法改革や学術用語の整備といった現代アラビア語論を展開した。各々のアカデミーが設立の理念や目的を規約等に謳っているが、概して言えば、①正則性の保持、②古典文学の校訂・出版による古典復興、③タアリーブ問題と学術用語の編纂、④文法改革(正書法改革を含む)

²⁴ しかし、財政難から7回の活動をもって活動を停止している。ジュルジー・ザイダーンは『ヒラール』誌で、イブラーヒーム・ヤーズィジーは『ムクタタフ』誌で、それぞれバクリー・アカデミーの再開を訴えた[al-‘Uṣaymī 1995: 20]。

²⁵ 例えば、1916年には、エジプト国立図書館長を務めていたルトフィー・サイイド(1872-1963)によって国立アカデミー(al-majma‘ al-ahlī)が設立された。自然科学、文芸、哲学といった分野の専門用語の整備と学術用語辞典の編纂を提唱するも、1919年革命をもって解散という短命に終わっている。

²⁶ 1967年に名称を「ダマスカス・アラビア語アカデミー」に変更している。シリアのアカデミー設立にいたる歴史背景については[新妻 1992]を参照のこと。

²⁷ 1938年に名称を「フアード1世アラビア語アカデミー」へ変更し、1954年に現在の「カイロ・アラビア語アカデミー」となる。[内記 1965]は、近代アラビア語の整備という視点から、この王立アカデミーを限定的ではあるが先駆的に取り上げている。

の四点が共通した主要事項である²⁸。

急速な印刷媒体の発展と教育の普及に伴い、アラビア語の正則性の保持を至上命題とするアカデミーにとって、現代語彙の精選と学術用語の整備は緊急の課題であった。その先には、現代教育に則した学習辞書の編纂や学術用語の制定を見据えていたわけであるが²⁹、その際にまず議論の俎上に上がったことは、時代的にいつまでの語彙を「フスハー（正則語）」とするか、という規範に関する問題であった。カイロ・アラビア語アカデミーは、設立直後に開催された第一回協議会（1934）で、まず「ムワッラド」に関する議論と採決を行った。この議題を担った学術用語委員会は、「ムワッラド語彙とは、アラブ人（遊牧民）の言語使用に基づくことなく、ムワッラド世代の人々が使用した語彙である」という保守的な定義を保持しつつも、ムワッラド語彙を、①アラビア語の語根概念と派生に基づき創出された科学技術用語と、②アラビア語化の様式に準じない外来語および即席的な新語、の2種に分類し、前者を正統な語彙として是認するという建設的な指針を提示した [MLAD 1965: vol.40(2), 715]。さらにアカデミー決議では、後者の大半を占める外来語使用についても若干の譲歩を見せ、「アラブ人のタアリーのブの方法（アラビア語の語根概念と派生）を最優先とし、必要な場合のみその使用を認める」とした。いずれの場合も、アラビア語化の方法論の一つとしてイシュティカーク（語根に基づく派生）に重点を置いている点が特徴である。この現代における新語・造語の正則化をめぐる議論は、前章で論じた「例証の時代」とも密接に関わっている。

古くは「社会学の父」イブン・ハルドゥーン（808/1406 年没）がムワッラド語彙に規範性を見出し [湯川 2008:120]、近代ではシドヤークが大々的に、「例証の時代」に縛られない「ムワッラド」レベルの例証を採用することで独創的な辞書編纂を試みたが [Khalīl 1985: 539]、その正則性をめぐっては未解決のままであった。フスハー推進者としても知られる文人ターハー・フサイン（1889-1973）は言語の記述主義に基づき、この「例証の時代」を現在まで広げるべきとの主張をした。また 20 世紀の文法改革を主導したイブラーヒーム・ムスタファー（1888-1962）³⁰もまた、積極的に「例証の時代」以降の用例を採用することに強い支持を表明した [al-'Uṣaymī 1995: 696]。共に、アカデミーの第二世代と呼ばれる層であり、アラビア語アカデミーを舞台に、現代アラビア語の規範化に関する論陣を張った。「例証の時代」の再解釈は現代文法学の構築においても非常に重要な意義を持った。正則とされる時代が後世に延びることで、アラブ文学史における詩や散文など豊富な例証に見られる用法が正統性を帯びるようになるからである。例えば、kull（全て）や ba'd（一部）に冠詞 al-をつける用法 [al-'Uṣaymī 1995: 71] や、限定数詞に非限定名詞をイダーファ構成でつなげる用法（例えば「その三枚の服」を al-thalāth athwāb-in のごとく） [al-'Uṣaymī 1995: 796] が、ムワッラド層の例証の存在ゆえに、正用法としてアカデミー決議で容認されている。さらに、この規範性の再解釈は、文法規則に限らず、本論が対象とする学術用語についても大きな意義を持つことになった。

語彙論と術語論の規範性について最大の転換点となったのは、1960 年のカイロ・アラビア語アカデミ

²⁸ カイロ・アラビア語アカデミーは、他に通時的記述に基づく『アラビア語歴史辞典』(al-Mu'jam al-Tārīkhī) の編纂や学術的な方言研究を挙げている [MLAQ 1935: vol.1, 6-7]。

²⁹ 例えば、エジプトでは、20 世紀中葉まで『スィハーフの要約』(Mukhtār al-Ṣiḥāḥ) 『ミスバーフ・ムニール』(al-Miṣbāḥ al-Munīr) といった古典的辞書を文部省指定の国定辞書として公立学校で使用していた。

³⁰ イブラーヒーム・ムスタファーの文法改革については [竹田: 2006] で詳論した。

一による『アラビア語中辞典』(*al-Muʿjam al-Wasīf* 以下、中辞典)の刊行である。アカデミーは、教育におけるアラブ世界の標準を目指し、当時のエジプトのアラビア語学界を代表するアブドゥッサラーム・ハールーン(1909-1988)を始め、イブラーヒーム・ムスタファー(1888-1962)、ザイヤート(1885-1968)などの識者を総動員し、この辞書を刊行した。現代アラブ世界で最も標準的とされるこの『中辞典』が影響力を持ったのは、古典期ばかりでなく近代アラビア語の草創期においても、定義と分類が曖昧であった「ムアッラブ」や「ダヒール」の分類を明確に示したことにあると考える。

それは、語形パターンを最大限に考慮した分類である。前章で見たように、古典期では「ムアッラブ」も「ダヒール」もかなり混合した用法で使われていた。それを『中辞典』では、アラビア語の語形パターンに基づきアラビア語化した語彙のか、単なる外来語の音訳なのか、によって分類した。前者が「ムアッラブ」で、後者が「ダヒール」である。双方とも外来語である点では共通するが、「アラビア語らしさ」の点で大きく異なる。

一方、「ムワッラド」という分類も設定されており、それは外来の語彙とは別範疇に置かれている。その特徴は、「例証の時代より後世の語彙」³¹と定義はするが、正則な古典語として辞書の語彙として積極的に採用した。さらに、「現代語彙」という分類を「ムフダサ (*muḥdatha*)」として新たに設定した。

「ムワッラド」と「ムフダサ」の境界線については、エジプトの言語学者シャーヒーンが「ムハンマド・アリー時代までがムワッラド語彙の時代、その後は言語の現代化 (*taḥdīth*) の時代である」[*Shāhīn* 1986: 351]と説明を加えている。アカデミーは、アラビア語学の伝統としての「例証の時代」の存在は保持しつつも、後世のムワッラド語彙と現代語彙について、正則語であるとの立場を明確に示している(第1回決議 24 部会での決議)。外来語と新語・造語を含めた現代語彙に関する位相とその定義に基づく4分類法(ムアッラブ、ダヒール、ムワッラド、ムフダサ)[*Madkūr et al.* 1960: 16]は、アラブ連盟付属機関 ALECSO(アラブ教育文化学術機構: 1964 年設立)による『アラビア語基礎辞典』[*Umar et al.* 1989: 61]にも継承されており、現代における語彙論の標準的分類となっている³²。

外来の語彙をめぐるタアリーブ論は、「ムアッラブ」と「ダヒール」の用語をめぐる考察から明らかのように、現代に入ると、アラビア語が元来有するワズン(語形パターン)に即しているか否かが、双方を区分する主要な判断基準となった。例えば、現代イラクにおけるタアリーブ論を展開したマトゥループや、エジプトのイウラフ改革論を展開したアニース³³の定義では、それぞれ「アラビア語の語形・文字・基準に則った古今の外来の語彙」、「古今を問わずアラビア語の語形・文字・基準に則っていない語彙」[*MLAD* 1999: vol. 75(4), 920]としており、形態上の「アラビア語らしさ」を非常に重視していることが分かる。

アカデミーの貢献は文法改革やタアリーブ論などの知的論争のための共通の場を形成してきたこと

³¹ アカデミーは「伝承の時代 (*ʿaṣr al-riwāya*)」という用語を用いているが、ここでは *ʿuṣūr al-iḥtijāj* と同じく「例証の時代」という訳語を充てた。

³² 例えば、チュニジアの辞書学を主導し、またアラブ世界の語彙論研究で名声を馳せているハムザーウィーは著書『術語方法論』の中で、「ムアッラブ (*muʿarrab*) とは非アラブ的な (*aʿjamī*) 単語を意味し、アラビア語が有する語形パターン (*awzān*) に即した単語である」と定義し、例として *ʿuṣfūr* のパターンと同じ *duktūr* を挙げている。またダヒール (*dakhīl*) については、「非アラブ的な単語である点はムアッラブに共通するが、ワズンがアラビア語に従っていない単語、例えば *hīdrūjīn* (水素化分解) などである」[*al-Ḥamzāwī* 1986b: 40 fn]と説明している。これはアカデミーや ALECSO の分類を継承するものである。

³³ アニースの展開した語末停止のイウラフ論については[竹田 2009]を参照のこと。

にある。20 世紀以降の現代アラビア語論は、アカデミー機関誌への投稿論文や、アカデミー協議会を舞台に、学術的にも飛躍的な向上を見せた。現代に入り、アラビア語化された外来語や新語・造語が正統性を有し、「例証の時代」とは別次元において正則的語彙の地位を獲得した。その過程では、語彙生成に重要な「イシュティカーク」（語根に基づく派生）が強調され、アラビア語本来の語形パターンがより重視されるようになった。学術用語の整備を担う知識人や翻訳家はこの「アラビア語らしさ」に最大限の配慮をしつつ、新語をいかに造語していくかを模索した。その一つが、2 語の語要素を抽出し、1 語を形成することで生成される「混成語」に関する議論である。次章では、この「混成語」と学術用語の制定をめぐる議論について考察を行う。

IV. 現代におけるタアリーブ論の展開

4.1. ナハトによる造語論

19 世紀のナフダ期から 20 世紀初頭にかけて、知識人を中心に新たな概念や西欧語の専門用語が輸入・翻訳された結果、多量のアラビア語化した造語や新語が印刷媒体を通じて登場した。1923 年のオスマン帝国崩壊後、アラブ諸国が独立し、各国の憲法でアラビア語を公用語や国語として規定していく過程は、民族語としてのアラビア語形成において非常に重要な役割を果たした [竹田 2009]。教育の言語としてのアラビア語の整備が急務とされる中、外来の学術用語をいかに「アラビア語らしく（アラビア語化して）」表現するかは、教育者や各学会の大きな課題の一つであった。例えば、「アラブ民族主義の父」サーティウ・フスリー（1883-1967）は、1928 年にイラクの教育雑誌（*Majalla al-Tarbiya wa al-Ta'lim*）に発表した論考で³⁴、「アラビア語における学術用語の問題は、知識人、教師、翻訳家、作家の最大の関心事の一つになっている」[al-Ḥuṣrī 1985: 73] と述べている。フスリーは、1918 年にダマスカスに樹立されたファイサル政府の教育相を務め、ファイサルがイラク国王となった後も 1921 年から 27 年までイラクの教育相としてアラビア語の普及を積極的に推進した人物である。各国にアラビア語アカデミーが設立され、現代学術用語の整備が活発化した 20 世紀中葉は、アラビア語を機軸とする現代アラブ世界の形成期であり、フスリーによる「アラブの国々に帰属し、アラビア語を話す者はアラブ人である」[小杉 2006: 743] という定義が成立しアラブ世界に定着していく時期でもある。

アラビア語は周知のとおり、三文字を語基とし派生によって単語を生成する。アラビア語学では、この派生を「イシュティカーク」と呼ぶ。アラビア語にとって中枢とも言える語基（*judhr*）や語形パターン（*wazn*）を論じる分野はイシュティカーク論と呼ばれ³⁵、伝統的なアラビア語学の重要な一分野をなしている³⁶。

³⁴ 本論では、アラブ統一研究センターが刊行するフスリー論考集 [al-Ḥuṣrī 1985] に依拠した。

³⁵ 池田 [1969: 39] は、「語原」という訳語をあて、ヴェルステーフは「時に西欧の用語では *etymology* と訳され」[Versteegh 1997: 82] としているが、語根の配列や派生を論じる点を考慮すると、若干のずれを感じる。近年刊行された『アラビア語学辞典』[Versteegh et al. 2007: vol.2, 447] では、特に訳語を充てず *ishtiqāq* としている。本論でもアラビア語の用語のまま「イシュティカーク論」と呼ぶことにする。

³⁶ 概して、イシュティカークは以下の 2 種に分類される [cf. 池田 1969: 39]。一つは、「最小（アスガル *aṣghar*）」または「小（サギール *ṣaghīr*）」と呼ばれ、例えば *naṣara, naṣr* など語根も文字配列も同じ語彙。もう一つは「大（カビール

アラビア語の語彙の一大特徴は、三語根から枝のように単語が生成されるこのイシュティカークにある。それゆえ、アラビア語にとって最も「アラブらしい」造語法はこのイシュティカークによるものということになる。ナフダ期の知識人やアラブ民族主義者たちは、この派生形式を最大限に生かし、生活語彙や学術用語のアラビア語化（タアリーブ）に取り組んだ。**sayyāra**（自動車）という単語は、社会的にも認知され定着に至った典型例と言えよう。「自動車」がアラブ社会に誕生した当初は、フランス語からの借用語である **ūtūmūbīl** が使用されていた³⁷。しかし「ウルバーの長老」の異名を持つアフマド・ザキー・バーシャー（1867-1934）などによって盛んに **s/y/r**（「進む」という概念の語根）から派生させた **sayyāra** という語彙の使用が唱えられた [MLAU 1993: vol.45, 90]³⁸。社会的な結着は、本来的なアラビア語の三語根 **s/y/r** に行為者名詞 (**ism al-fā'il**) の強意形のパターン (**fa"āla** 型) を充てることで造られたこの **sayyāra** であった³⁹。**sayyāra** という語彙については、当初、クルアーンの用法⁴⁰とは異なるがゆえに混合する恐れがあるという懸念も聞かれた⁴¹。「電話」についても **telephone** に由来する **talfūn/tilfūn** という借用語のほか、**tilighrāf nāṭiq**（発話する電報）や **āla mutakallima**（話す機械）/**irzīr**（震える音）/**mismā'**（聞く道具）/**miqwal**（語る道具）/**nadī**（呼びかけられる人・もの）/**misarra**（秘密[を話すため]の道具）/**hātif**（叫ぶ人・もの）など多くの語彙が考案された [MLAU 1993: vol.45, 88; al-Ḥamzāwī 1986b: 67]。現代アラブ世界では、外来語の **tilfūn** も社会に定着する一方、アラビア語古来の語彙 **hātif** が正則的な語彙として大きな支持を獲得し、実用に至っている。

一方で、アラビア語は西欧語の語構造とは異なる点も多く、翻訳やアラビア語化が困難な語彙にも直面した。元の語彙の音や綴りをそのままアラビア文字に移し表記するという、音写方式に依拠せざるを得ない場合も少なくなかった。特に、西欧語は現代英語のように **pre-**, **-able**, など接頭辞や接尾辞を附加することで複合語にする造語法や、**motel** (**motor**+**hotel**) や **transceiver** (**trans**+**receiver**) のような混成語（かばん語とも呼ばれる）[太田 2001: 861] が非常に多く⁴²、その場合はアラビア文字による音写は、読み手にも書き手にも大きな負担となる。その際に依拠した造語法の一つが、アラビア語で「ナハト」と呼ばれる造語法であった⁴³。

古典期の語彙論を展開したイブン・ファールス（395/1004 年没）は『サーヒビー』で「ナハトは二

kabīr」または「最大（アクバル **akbar**）」と呼ばれ、例えば **jadhb, jabadh** のように、同語根だが文字配列が異なる語彙。後者は、「交替（**qalb lughawī**）」と同義である [al-Tūnjī et al. 1993: vol.1, 63]。

³⁷ 20 世紀前期のエジプト映画（例えば 1931 年の *Ṣāhib al-Sa'āda Kishkish bik* や、1934 年の *Ḥawādith Kishkish bik* など）を通じて、**ūtūmūbīl** の使用が確認できる。

³⁸ アティイヤの『外来語辞書』[Aṭīya 2003: 220]によると、**sayyāra** を初めて使用したのは、このアフマド・ザキーである。

³⁹ **fa"āla** 型が器具名詞 (**ism al-āla**) の語形パターンとして認められたのは 1954 年のアカデミー決議による。エジプトでは、旧国定教科書 [al-Ḥammādī et al. 1971: 220] 以前の学校文法では扱われていない。他の新しいパターンとしては **fī'āl, fā'ila, fā'ūl** 型があり [池田 1976: 169]、これらは 1963 年に器具名詞として認められた [Amīn et al. 1984: 47-48]。

⁴⁰ クルアーンにおける使用例は、3 箇所 (Q.5:96, 12:10, 12:19) で、いずれも「隊商（あるいはその旅人ら）」の意味。

⁴¹ 例えば、エジプトのモダン主義作家ハイカルは、1928 年アカデミー誌に投稿した「**sayyāra** か **ūtūmūbīl** か」と題する論考でクルアーンとの用法の相違を指摘し、**ūtūmūbīl** の使用への支持を表明している [MLAD 1928: vol.8(1), 301]。

⁴² インド・ヨーロッパ語族であるペルシア語も、この種の混成語が非常に豊かである。よってペルシア語からの借用語であるアラビア語語彙には、例えば **kahrabā'** が **kāh** と **rubā, ṭarbūsh** が **sar** と **push** のように、混成語による語彙が多く見られる [Khāqānī 1998: 22; Ṭarazī 2005: 298]。イラクの言語学者ジャウワードは、「ペルシア語は、語彙の混成による造語に優れたインド・アーリア語族の一言語である」[Jawwād 1998: 288] と述べている。

⁴³ 「ナハト」とは元来「彫る」を意味する。英語学の「混成 (**blending**)」と呼ばれる造語法に相当する。一方、接頭辞や接尾辞を附加することで生成される語彙は「複合語 (**tarkīb mazjī**)」と呼ばれる。

つの原語の一部を取り出し混成することで新しい単語を作ること」[Ibn Fāris 1964: 271]と定義している。近代に入りこの造語法を提唱した人物が、先述のシドヤークであった。続いて文芸復興を代表するレバノン出身の文人ザイダーンも主著『アラビア語思想』の中でナハトによる造語に言及[Zaydān 1987: 76-78]するなど、挙って知識人たちはこのナハトによる造語に注目した。20世紀の初頭1908年に『イシュティカークとタアリーブ』によって学術的なナハト論を展開したマグリビー[al-Maghribī 1908: 71]が示す分類に拠れば、ナハトは①二つの固有名詞を混成しニスバ形容詞とする「ニスバ型 (nisbī)」(例えば、al-shāfiʿī シャーフィイー+abū ḥanīfa アブー・ハニーファ→ shafʿantī シャーフィイー・ハナフィー学派の)⁴⁴、②二つの語彙の混成により動詞とする「動詞型 (fiʿlī)」(例えば、「subḥānallāh と言う」という行為を、動詞 sabḥala とする)、③二つの語彙の混成により名詞とする「名詞型 (ismī)」(例えば、jaluda 固くなる+jamada 凝結する→julmūd 巨礫)、④二つの語彙の混成から強意の形容詞とする「形容詞型 (waṣfī)」(例えば、ṣalada 固くなる+ṣadama 衝突する→ṣildim 蹄の強い〔馬〕; ḍabaṭa 捕まえる+ḍabara 跳ぶ→ḍibṭar 俊足で最強の〔ライオン〕)の4種類に分けられる⁴⁵。

ナフダの先駆者をはじめ20世紀初頭の知識人たちは、ナハト構造を近代化にともなう現代学術用語の造語法として有効な手段の一つと考えた。特に医学・薬学の分野では、この造語法が有効であると考えられた[MLAQ 1961: vol.13, 62, 69]。例えば、「切り離すこと」を意味する-ectomy という接尾辞や、「～痛」に相当する-algia をいう接尾辞は、外科用語で多用される。そこで、「根こそぎにする」の意味の istaʿṣala の一部 ṣala と他の語彙の一部、また「痛み」を意味する wajaʿ の waj と他の語彙の一部を混成することによって、それぞれ以下のような語彙が提案された⁴⁶。

ṣala + kulwa (腎臓) → ṣalkala (【医】腎臓摘出) = (英) nephrectomy
 ṣala + lawzatāni (扁桃腺) → ṣalwaza (【医】扁桃腺切除) = (英) tonsillectomy
 ṣala + maʿida (胃) → ṣalʿada (【医】胃切除) = (英) gastrectomy
 waj + kabd (肝臓) → wajbada (【医】肝臓痛) = (英) hepatalgia
 waj + mathāna (膀胱) → wajthana (【医】膀胱痛) = (英) cystalgia

このナハト論推奨の流れを継承し、さらに理論化して教育現場への応用を試みたのが、先述のフスリーである。フスリーは、イシュティカークだけでは現代思想を表現するに充分ではなく、ナハトによる造語法を活用することで、各分野の現代学術用語がアラビア語によって制定可能になると考えた[al-Ḥuṣrī 1985: 81]。そして、自らの論考の中で積極的にナハトによる造語を学術レベルで用い、各界に大きな反響を呼んだ[al-Ḥuṣrī 1985: 91]。例えば、次のようである⁴⁷。

⁴⁴ カイロ・アラビア語アカデミーメンバーのジルジスは、shafʿanfī が形態的には正しいという見解を示している[MLAQ 1961: vol.13, 66; Ṭarazī 2005: 294 fn.]。

⁴⁵ いずれの用例も、マグリビーは古典に依拠していると考えられる。例えば『ナハト語彙辞典』[Maṭlūb 2002: 77]によれば、ṣildim (蹄の強い〔馬〕) という単語は、古典期の女流詩人ライラー・イブナ・タリーフ (200/815 年没) の古詩、wa lā al-dhukhru illā kulla jardāʿa ṣildimī [ṣildamī と同] (財宝は、駿馬の純心のほかに何も無い) を例証としている。

⁴⁶ [MLAQ 1961: vol.13, 69] の例を参照した。

⁴⁷ [al-Ḥuṣrī 1985: 88-90] の例を参照した。フスリーは、lā を接頭させることで形成される語彙を積極的に評価している。例えば、当時流布していた以下のような語彙である[al-Ḥuṣrī 1985: 87-88]。

lā (非～) + adrī (私は知る) → al-lāʿadriya (【哲学】懐疑論) = (英) skepticism

ana (私) + markaz (中央) → anarkazīya (【心】自己中心性) = (英) egocentrism
 ḥulm (夢) + yaqza (目覚め) → ḥalqaḥ (白昼夢) = (英) daydream
 ḥayawān (動物) + jurthūma (細菌) → ḥaythūma (【動】孢子虫) = (英) Sporozoa
 ghab (〜の後) + jalīd (氷) → ghabjalīd (【地質】後氷期) = (英) postglacial
 taḥ (〜の下) + shu'ūr (感情) → taḥshu'ūrī (潜在意識) = (英) subconscious

フスリーは学術用語のアラビア語化による近代知の復興にはナハトが有効と考え、1928 年イラクの教育誌に「ナハト」(al-naḥṭ) と題する論文を発表した。その中でフスリーは「この造語法を受け入れなければ、西洋の専門用語 (iṣṭilāḥāt ifranjīya) そのものを使い続けることになりかねない」と警告を促した [al-Ḥuṣṣī 1985: 90]。この主張の背景には、彼が推し進めたアラビア語による教育の普及とアラブ民族の紐帯としての現代アラビア語の形成があることは明白であろう。

実際、前述のシドヤークやザイダーンのほか、マグリビー (1867-1956)、イラク出身のアルूसィー (1856-1924) といったナハトを推進する知識人や言語研究者たちは、ナハトの正統性をアラビア語の古典期に求め、多くの学術的議論を展開した。彼らは特に、古典期からナハトの用法を見出すことで、その造語法の正統性を主張し、アラビア語の近代化の問題をアラブの古典期とリンクさせることで、解決しようと試みた。確かに、古典期からナハトの造語法は存在する。例えば、アラブ文法学・韻律論の祖であるハリールは、『アインの書』で既にナハトによる語彙を記述している [al-Farāhīdī 2001: 591]

48。

fa-bāta khayālu ṭayfi-ki lī 'anīqan ilā an ḥay'ala al-dā' al-falāḥa (下線筆者)

「あなたの面影を胸に眠る、成功に来たれの聲がかかるまで」

ここでは、暁の礼拝を告げる「アザーンの文言 (ḥayyā 'alā al-ṣalā, ḥayyā 'alā al-falāḥ) を発すること」を意味する完了形動詞として混成語 ḥay'ala が用いられている。

また前述のイブン・ファールスは『サーヒビー』で、「4 語根、5 語根の語彙の大半は、ナハトによって形成された語彙である」[Ibn Fāris 1964: 37] という議論を展開し、4 語根の単語を集中的に収録した辞書『マカーイス』では、ナハト語彙を包括的に記述した。さらに 15 世紀に活躍した大学者スユーティーも『ムズヒル』[al-Suyūṭī 1998a: vol.1, 371-374] で、古来の言語学者によるナハト語彙を列挙している。このように、古典期に既にナハト語彙が存在したことは疑いのない事実であった。これを根拠に、ナハト推進派は「類推 (qiyās)」により——すなわちナハト作成の造語法則を導き出しそれに則る形で——現代の学術用語を自由に生産することが可能であるとした。これに対し、先述のイラク人言語学者ジャウワード、さらに現代術語辞典『シハーフ』(al-Ṣiḥāḥ fī al-Lughā wa al-'Ulūm) の編者として知られるアラーイリー (1914-1996) らは、現代におけるナハト語彙の使用は、「例証の時代」の「慣用 (samā'ī)」として記録された用法に限定するべきと慎重かつ保守的な姿勢を見せた⁴⁹。

lā (非〜) + markaz (中央) → al-lāmarkazīya (【行政】地方分権化) = (英) decentralization

しかし、これらの造語は厳密に言えばナハト構造ではなく、「複合語 (tarkīb mazjī)」である [cf. Ali 1987: 82]。

⁴⁸ 『アインの書』の同箇所 [al-Farāhīdī 2001: 591] には他に 3 つの例証が挙げられている。

⁴⁹ 伝統的には、イブン・マールクのように「アラブ (遊牧民) の表現の慣用である」とナハトを慣用 (samā'ī) とする文

この双方から浮上した問いは、ナハトは正統なタアリーブの造語法なのか、そしてナハトによって生成された語彙 (manḥūt) は「アラビア語的」な語彙なのか、という根本的なものであった。そしてこの問いは、アラビア語は三語根を基本とするというイシュティカーク論の根本原理と密接に関わる議論へと展開した。

4.2. イシュティカーク論とナハトによる造語の帰結

現代アラブ知識人らによるナハトをめぐる議論は、語根概念を重視するアラビア語の本質にかかわるがゆえにアラブ諸国で大きな論争を生んだ。反対派は、ナハトによる造語が過度に拮据することで、アラビア語のイシュティカーク的特長が損なわれ、ひいてはアラビア語がアラビア語らしさを失うのではと危機感を募らせた。古典期においても、文法学の枠組みでイシュティカークの分類を論じたイブン・ジンニー (392/1002 年没)⁵⁰は、ナハト構造をイシュティカークには入れていないが、20 世紀始めにナハト論研究を行った前述のマグリビーは、先述の『タアリーブとイシュティカーク』の中で「イシュティカークは一語内における語根配列と派生を論じる分野であり、2 語または 3 語からの語彙形成はナハトで、まったく別物であろう」[al-Maghribī 1908: 13] と否定的立場を取った。またシリア・アカデミーを代表する術語論の論客で、20 世紀初期に『学術用語集』を先駆的に編纂したシハービー (1893-1968) は、「ナハトは (例証の時代の) 慣用に限定するべき」と強調した上で「なにゆえに外国語の専門用語 1 単語をアラビア語 2 語によって表現することを嫌うのであろうか」と、khāmadrasī (課外の)、fawsawī (超常の)、taḥshu'ūrī (潜在意識の)、qablūghī (未成年の) という 4 つのナハトの例を挙げ批判を展開した [MLAD 1959: 34(4), 551]。彼によれば、「学校課程外の」「常態を超えた」「意識の下にある」「成年に達する以前の」というような 2 語を用いた表現で十分であった。さらに、語彙論 (=フィクフルガ fiqh al-lugha) の研究者であるムバーラクはイラクのアカデミーへの投稿論文で、「ナハト構造は古典期からあったが、現代になって新語の生成論 (tawlīd al-alfāz al-jadīda) が興隆するまでは、造語はイシュティカークに依拠していた」[MII 1980: 31(2), 183] と述べ、造語法の王道であるイシュティカークに戻るべきと主張した。

またイラクの言語論者カルマッリーは 1954 年にレバノンで開催されたアラブ文学会議で、psychosomatique (心身医学) の訳を al-ṭibb al-nafsī al-jismī (心の・身の・医学) にするべきと、ナハト支持者の al-nafsajī, al-nafsajismī (ナハト造語の「心身学」) という提案を批判した [Jawwād 1998: 264]。彼は、「アラビア語はイシュティカークの言語であり、ナハトに依拠しなくても十分である」[Maṭlūb 2001: 21] とナハトに対して批判を展開した論客であった。イラク・アカデミーの論客マラーイカも、アカデミーへの投稿論文を通じて kubākaḥd (硫黄鉱)⁵¹、maṣṣa'lājida (非再生天然資源)⁵²、ḥizḍar (緑

法学者も存在した [Ṭarazī 2005: 297]。

⁵⁰ 池田 [1969: 35] は、イブン・ジンニーをバスラ学派のイブン・ドゥライド (321/933 年没) 以来のイシュティカーク論の業績をあげた文法家としている。

⁵¹ kibrīyātāt (硫黄) と ḥadīd (鉄) の混成語。

⁵² maṣādir ṭabī'ya (天然資源) と lā (非～) と mutajaddida (再生できる) の混成語。

地帯)⁵³を例にナハトの行き過ぎへ苦言を呈した。[MII 1983: 34(3), 113]。これらの批判はみな、ナハトの容認と多用によって、本来のアラビア語の特徴を失いかねないという危機感から来るものであったと考えられる。

一方で、この語彙構造をアラビア語の本質にかかわる問題として、イシュティカークと関連付ける主張もなされた⁵⁴。その提唱者は、1956年に刊行された『イシュティカークの書』の著者であるエジプト人アブドゥッラー・アミンであった。アミンはナハト構造に「巨大イシュティカーク (ishtiqaq kubbār)⁵⁵」という用語を充て、ナハトはイシュティカーク的語彙形成であると主張した [Amīn 2000: 391]。アミンが提案あるいは収集した語は、「急行」を意味する借用語 *iksburīs* (エクスプレス) の翻訳語である *qitār sarī* (急行列車) を混成した *qatsar* や、「ダールルウルーム *dār al-‘ulūm* 卒業生」の混成語 *dar‘amī*、さらに「四肢動物」の *arbajl* (*arba* ‘4本の + *rijl* 足の混成語) などであり、その豊富な用例は示唆に富み、この斬新な用語のインパクトも強く現代のアラビア語論でも大きな議論を呼んだ。少なからぬ現代アラビア語研究者が彼の「ナハトはイシュティカークの一種である」という主張に賛同し、ナハト推進派としての一つの潮流を作った。[al-Kūsūfī 2004: 125; Ṭarazī 2005: 290, f.n.]。ナハト推進派の多くは、古典の使用例を根拠にしつつ、さらにイシュティカークの枠組みにナハトを入れ込むことで、造語法自体の正統性を主張し続けたのである。

しかし、「例証の時代」の慣用のみに限るべきか、あるいは類推によって造語生産可能とするのか、そもそもナハトはイシュティカークと呼べるのかなど、総じてこの論争は混沌を極めた。これらの議論の知的議論の場を提供し、最終的な調整役として機能したのが、カイロ・アラビア語アカデミーであった。

カイロ・アラビア語アカデミーは設立当初から、ナハトによる学術用語の生成を議題の中心として扱ってきた。アカデミーは、アズハル総長を務めたシャルトゥート (1893-1963)⁵⁶など著名なイスラーム知識人を含む特別委員会を立ち上げ⁵⁷、ナハトに関する議論を開始した。委員会はまず、1946年から翌47年にかけて研究会を重ね、第23回協議会の第8分科会にて、自然科学分野における16の混成語をアカデミー用語として提示した [MLAQ 1953: vol.7, 204; MII 1980: 31(2), 168]。例えば、次のようである。

ḥalla (分解) + mā’ (水) → ḥalma’a (【化学】加水分解する) = (英) to hydrolyse
barr (陸) + mā’ (水) → barmā’ī (【生物】[水陸] 両生類の) = (英) amphibian⁵⁸

⁵³ ḥizām (ベルト) と akḥḍar (緑) の混成語。アブドゥッタウワブ [‘Abd al-Tawwāb 1980: 270] は、asmar (黒褐色) について、aswad (黒) と aḥmar (赤) の混成語であるという説を唱えている。

⁵⁴ イシュティカーク論は3文字を基本とするが、4文字の単語をいかに扱うかについては、古典期では文法学派によって見解の相違がある [Amīn 2000: 406-407]。

⁵⁵ kubbār は fu‘āl 型の語形パターンで、強調形 (ṣiḡha mubālagha) の一つである [Ya‘qūb 1993: 140]。つまり kabīr (大きい) の意味を強めた形。

⁵⁶ 1958年から死去する63年までアズハル総長を務めた。現代的な方法論に基づく啓蒙解釈学 (タフスィール) や現代科目の導入に代表されるようなアズハルの教育改革を積極的に行ったことで知られる。

⁵⁷ 委員会はシャルトゥートを始め、イブラーヒーム・ハムラウィシュ、アフマド・ザキ、ムスタファー・ナズィーフ、アブドゥルカーディル・マグリビーの5名から構成された [MLAQ 1953: vol.7, 201]。

⁵⁸ [MLAQ 1953: vol.7, 204] では、英訳に amphoteric (【化学】両性の) を充てているが、これは誤訳であろう。語基となる2語の「水」と「陸」という意味に鑑みると、amphibian ([水陸] 両生類の; 水陸両用の) が正しい。例えば、

shibh (半〜) + zulāl (淡水) → shibzāl (【生化学】アルブミノイド) = (英) albuminoid

naza'a (取り除く) + idrujīn (水素) → nazjana (【化学】脱水素反応させる) = (英) dehydrogenation

しかし、前節で述べたように、ナハト論争はアラビア語学の法源論 (uṣūl al-naḥw) を含む多角的、かつ広範な議論に発展したこともあり、アカデミーによる議論は長期化した。ナハトに関する議論が盛んに交わされた 40 年代は⁵⁹、バアス党の設立やアラブ連盟の設立 (1945)⁶⁰ に象徴されるように、汎アラブ主義の隆盛期でもあった。それゆえ、エジプト一国、あるいはシリア国内の問題といったような議論では収拾せず、各国の研究者や知識人による見解がカイロのアラビア語アカデミーを舞台に交わされた。

1948 年に採決されたアカデミー決議は、「科学分野の必要に応じて、混成語 (naḥt)、複合語 (al-tarkīb al-mazjī) を是認する」(第 14 回協議会) [Amīn et al. 1984: 21] というものであった。アカデミーは、理系分野に限りナハトの造語法を認め、現代語彙学術用語の豊潤化と教育言語としてのアラビア語の普及を目指した。しかし、1965 年の第 31 回協議会では、ナハトは古今の語彙形成法であると是認する一方、語形パターン (ワズン) に関する記述「ナハト語彙 (名詞) はアラビア語の語形パターンに則ることが絶対条件である。さらに形容詞はヤーの付いたニスバ形容詞で、動詞の場合は、fa'lala/tafa'lala のパターンに則らなければならない」[Amīn et al. 1984: 22] が追加された。これは、汎アラブ主義を背景に各国の知識人が強調し続けた「アラビア語本来の形態」への配慮が反映された結果と考えられる。

現在のアラビア語の語彙の中におけるナハトによる造語法は、それなりの位置を占めているものの、ナハト推進論者が求めた方向と比べると、その用法は限定的なものとなっている。複雑な論争を通じて、ナハトがアラビア語の歴史的な伝統に根ざす正統なものであることが認められた一方、造語法としては、主として自然科学の分野で推奨され、その他の日常的な用法のレベルでは限られたものとなった。ここに、現代アラビア語が、現代語として有用性を持つと同時に、アラブ世界を構成する多様な諸地域の話者たちの「共通語」として機能しなければならない、という二つの現代的な要請を持っていることが示されている。ナハトの造語法による新語は、共通語の語彙として短期間で定着するには、新奇なものが多すぎたと言うべきであろうか。

おわりに

本論は、現代アラブ世界が 19 世紀以降に形成され、20 世紀においてさらに発展する過程と並行して、標準的な現代アラビア語が確立されていく過程が相互補完的に進行したことを実証的に論じることを目的とする論考の一環をなしている。そのため、本論では、アラビア語が、現代的な言語として必要な

アラブ世界内外で最も人口に膾炙している辞書の一つである『マウリド』(英語-アラビア語) では、amphibian の訳語に barmāṭī が充てられている [Ba'lbaki 1997: 27]。

⁵⁹ この時期にナハト論が高揚を見せたことは、例えば、先述のマグリビーによるナハト論の著作『タアリーブとイシュティカーク』(1918 年の初版) が、47 年にカイロで再刊されたことから伺える。

⁶⁰ 1945 年の設立時に定められたアラブ連盟文化協定 (al-mu'āhada al-thaqāfiya) には、学術用語に関する条文がある。それ条文の内容は以下の通り。「各会議、委員会、アカデミーにおける学術用語を統一し、出版物に反映させること。(・・・) それらの用語を、アラブ諸国の教育課程各科目における学術用語とすること」(第 9 条)。[al-Zarkān 1998: 385]

語彙の整備を、外来語をタアリーブ（アラビア語化）によって受容し、吸収することで進めてきたことに焦点を当てて考究した。現代的な諸科学や文芸を表現する能力は、アラビア語が現代語となるためには不可欠なことであり、その整備は、明解な学校文法の編纂や正書法の確立と並ぶ重要性を持つ。

しかし、これまでのアラビア語研究では、古典期に関しても現代に関しても、外来語を吸収するメカニズムについては研究課題として看過されてきた。本論はその空白を埋め、古典期と現代におけるタアリーブ（アラビア語化）論がどのような内実を持っているのかを明らかにすると同時に、現代における外来語受容に際して、古典期の議論がどのような形で援用され、批判され、場合によっては語学的に深化されてきたのかを明らかにした。

古典期から現代まで続くアラビア語論の特徴の一つは、「本来的なアラビア語」「純粋なアラビア語」とは何かを常に問い、本来的で純粋とされる語彙や語法を尊ぶという傾向であった。しかし、その点の特徴が継続しているとはいえ、古典期において、ヒジュラ暦4世紀半ばまでの「例証の時代」のみが語彙や表現の規範的な例証に用いられたのに対して、19世紀のナフダ（文芸復興）以降の文人や文法学者たちは、それ以降のいわゆる「ムワッラド」の時代をも正統な用例として承認するに至った。これは、アラビア語の言語としての歴史的な蓄積を正当に評価することであり、それが正則的な現代アラビア語を成立させるための時代の要請に沿うことでもあった。

外来語についての近現代の議論が大きく前進したことは、外来語の分類が明確になった点にも現れている。古典期には、外来語を示す用語である「ムアッラプ」と「ダヒール」の区分は文法学者や辞典編纂者によってまちまちであったが、現代では、前者を「アラビア語の語形パターンに基づきアラビア語化した語彙」、後者を「外来語の音訳」と定義した。さらに、古典期には例証に用いられなかったムワッラド時代の新しい語彙を「ムワッラド」、新語・造語を含めた現代語彙を「ムフダサ」と定義し、これらの4つの語彙分類が、現代アラビア語の中で定着するに至った。これらの語彙はいずれも正則語の範疇に含まれ、現代の辞典においてもそのように扱われている。

主として西洋近代文明に由来する新しい概念や語彙を、アラビア語の中に取り込む上で大きな貢献したのは、19世紀のナフダ知識人たちであった。特に、この面では、タフターウィー、シドヤーク、ヤーズィーなどの貢献が著しいものであったことを、本論で明らかにすることができた。彼らに共通する点は、西洋の先進性を取り入れる形での近代化を評価する一方で、母語であるアラビア語の造語力と生産性に絶対の自信を持っていたことであった。また、この時期の特徴として、彼らは印刷媒体の目覚ましい普及に注目した。いずれも、この知的活動の発信の場として雑誌や新聞を最大限に活用し、巧みなまでにアラビア語の語形パターンに則す形で近代化に伴う新概念や生活語彙のアラビア語化を実行したのであった。本論では、彼らの造語を収集し、実証的な分析を試みた。彼らが信頼を寄せたアラビア語の造語力は、彼らによる造語の作業を通じて、実践的に証明されることになったのである。

ナフダの先達者をはじめ19世紀後期から20世紀はじめにかけては、専門用語が多く生まれ、その調整役としてのアカデミーの設立が提唱された。その後、実際にシリア、エジプト、イラクに相次いでアカデミーが設立された。その最大の目的は学術用語の整備であり、それは民族語としてのアラビア語の普及とも密接に関わっていた。本論で明らかにしたアカデミーの貢献は、古典期に曖昧であった外来語や新語をめぐる用語と定義を明確に示したこと、そしてアラビア語をめぐる知的議論の共通の場を提供

し、民族語としてのアラビア語の形成を強化したことである。アラビア語アカデミーはアラビア語の現代化を支える論議と作業をおこなう場となり、そのような共通の議論の場が、アラブ人の共通語としてのアラビア語を鍛える役割をも担った。

言うまでもなく、アラビア語の現代化が民族語の形成を推進する性質を持つ以上、単に、外来語によって語彙を豊富にするだけでは、その目的は達成されない。アラビア語の本来的な純粋さ、アラビア語の「アラビア語らしさ」を求める傾向は、古典期から継承され、ナフダ時代の文芸復興、その後の民族意識の覚醒を通じて、それは強まった。そのため、外来語と新しい語彙の生成をめぐる議論は、アラビア語の基本構造である「語根からの派生（イシュティカーク）」を重視するものとなり、新語を造る際にもイシュティカークを用いることが重視された。

他方、もう一つ造語法として注目を浴びたのは、2語（または3語）から混成語を造る「ナハト」による造語法であった。ナハトは、イシュティカークの一種であるとの議論もあり、ナハトを用いることの是非はアラビア語学者たちの間でも、アラビア語アカデミーでも、長期にわたって白熱した議論を呼んだ。

ナハトを用いた造語法は、医学における「腎臓摘出」のような専門用語を1語で表そうとする場合に、「肝臓」と「摘出」の2語を1語にすることによって造語が可能であり、大きな有用性を持っている。その一方で、ナハトによる造語にはなにがしかの新奇さがつきまとい、提案者やその出身地域による偏りもありうる。それに比すると、純粋なイシュティカークによる造語法は、アラブ人に共有される言語的な遺産の存在によってアラブ世界の異なる諸地域において容易に理解されうる。ナハトによる造語法が、主として自然科学の分野で推奨される一方、一般的な語彙においては抑制されるようになったことは、イシュティカークによる外来語の受容が推進されたのと軌を一にしていたと言えるであろう。

このような流れの中に、科学技術を含む現代の学術用語を十全に扱うことのできる「現代語」としてのアラビア語の発展と、広域に及ぶアラブ世界の「共通語」としてのアラビア語の普及という2つの命題が、現代アラブ世界の形成に伴うアラビア語の課題として存在していたことが明らかとなっている。

引用文献

[欧文文献]

- Ali, Abdul Sahib Mehdi. 1987. *A Linguistic Study of the Development of Scientific Vocabulary in Standard Arabic*. London and New York: Kegan Paul International.
- Ba'lbaki, Munir. 1997. *al-Mawrid al-Wasēt: A Concise English-Arabic Dictionary*. Beirut: Dar el-Ilm lil-Malayēn.
- Bohas, G. and J. -P. Guillaume. 1990. *The Arabic Linguistic Tradition*. London and New York: Routledge.
- Goldziher, Ignaz. 1994. *On the History of Grammar among the Arabs: An Essay in Literary History*. trans. and eds. by Kinga Dévényi and Tamás Iványi. Amsterdam and Philadelphia: J.Benjamins.
- Hava, J. G. 1921. *al-Fara'id Arabic-English Dictionary*. Beirut: Catholic Press.

- Hegazi, Mahmoud F. 1994. *Wolfdietrich Fischer: Studien zur Arabistik und Semitistik*. Cairo: Faculty of Arts-Center for Arabic Language.
- Heyworth-Dunne, J. 1939. "Rifā'ah Badawī Rāfi' at-Ṭahtāwī: The Egyptian Revivalist," *Bulletin of the School of Oriental Studies*. London: The School of Oriental and African Studies. 11(4), pp.961-967.
- _____. 1940. "Rifā'ah Badawī Rāfi' at-Ṭahtāwī: The Egyptian Revivalist," *Bulletin of the School of Oriental Studies*. London: The School of Oriental and African Studies. 10(2), pp.399-415.
- Kopf, L. 1961. "The Treatment of Foreign Words in Mediaeval Arabic Lexicology," in Uriel Heyd ed. *Studies in Islamic History and Civilization*. Scripta Hierosolymitana, vol.9. Jerusalem: Magnes Press, Hebrew University.
- Meisami, Julie Scott and Paul Starkey eds. 1998. *Encyclopedia of Arabic Literature*. 2 vols. London and New York: Routledge.
- Suleiman, Yasir. 1999. *The Arabic Grammatical Tradition: A Study in ta'wīl*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- _____. 2003. *The Arabic Language and National Identity*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Versteegh, Kees. 1997. *The Arabic Language*. New York: Columbia University Press.
- Versteegh, Kees and Mushira Eid. 2007. *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics*. vol.2. Leiden: Brill.

[アラビア語文献]

- ‘Abd al-‘Azīz, Muḥammad Ḥasan. 1990. *al-Ta’rīb fī al-Qadīm wa al-Ḥadīth*. al-Qāhira: Dār al-Fikr al-‘Arabī.
- ‘Abd al-Tawwāb, Ramaḍān. 1980. *Fuṣūl fī Fiqh al-‘Arabīya*. 2nd. ed. al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī.
- ‘Abduh, Muḥammad. 1993. *al-A’māl al-Kāmila*. ed. by Muḥammad ‘Imāra. 5 vols. al-Qāhira: Dār al-Shurūq.
- Abū ‘Ubayda Ma‘mar ibn al-Muthannā al-Taymī. 1954. *Majāz al-Qur’ān*. ed. by Fu‘ād Sīzkīn. al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī.
- al-Afghānī, Sa‘īd. 1987. *Fī Uṣūl al-Naḥw*. Bayrūt: al-Maktab al-Islāmī.
- Amīn, ‘Abd Allāh. 2000. *al-Ishtiqāq*. 2nd. ed. al-Qāhira: Maktaba al-Khānjī.
- Amīn, Muḥammad Shawqī and Ibrāhīm al-Tarzī. 1984. *Majmū‘a al-Qarārāt al-‘Ilmīya fī Khamsīn ‘Ām*. al-Qāhira: al-Hay‘a al-‘Āmma li-Shu‘ūn al-Maṭābī‘ al-Amīriya.
- ‘Aṭīya, Rashīd. 2003. *Mu‘jam ‘Aṭīya fī al-‘Āmmī wa al-Dakhīl*. Bayrūt: Dār al-Kutub al-‘Ilmīya.
- Badawī, Aḥmad Aḥmad. 1950. *Rifā‘a al-Ṭahtāwī Bik*. al-Qāhira: Lajna al-Bayān al-‘Arabī.
- al-Farāhīdī, Abū ‘Abd al-Raḥmān al-Khalīl ibn Aḥmad. 2001. *Kitāb al-‘Ayn*. Bayrūt: Dār Iḥyā‘ al-Turāth al-‘Arabī.
- Fāyid, Wafā‘ Kāmil. 2004. *al-Majāmi‘ al-‘Arabīya wa Qaḍāyā al-Lughā: Min al-Nash’a ilā Awākhir al-Qarn al-‘Ishrīn*. al-Qāhira: ‘Ālam al-Kutub.
- Ghunaym, Kārim al-Sayyid. 1990. *al-Lughā al-‘Arabīya wa al-Ṣaḥwa al-‘Ilmīya al-Ḥadītha*. al-Riyāḍ: Maktaba

al-Sā'ī.

- al-Ḥammādī, Yūsuf and Muḥammad Muḥammad al-Shinnāwī. 1971. *al-Qawā'id al-Asāsīya fī al-Naḥw wa al-Ṣarf li-Talāmīdh al-Marḥala al-Thānawīya wa mā fī Mustawā-hā*. al-Qāhira: al-Hay'a al-Āmma li-Shu'ūn al-Maṭābī' al-Amīriya.
- al-Ḥamzāwī, Muḥammad Rashād. 1986a. *al-'Arabīya wa al-Ḥadātha*. Bayrūt: Dār al-Gharb al-Islāmī.
- _____. 1986b. *al-Manḥajīya al-Āmma li-Tarjama al-Muṣṭalaḥāt wa Tawḥīd-hā wa Tanmīt-hā*. Bayrūt: Dār al-Gharb al-Islāmī.
- al-Ḥuṣrī, Sā'ī'. 1985. *Fī al-Lugha wa al-Adab wa 'Alāqat-humā bi-al-Qawmīya*. Bayrūt: Markaz Dirāsāt al-Waḥda al-'Arabīya.
- Ibn Fāris, Aḥmad Abū al-Ḥusayn. 1964. *al-Ṣāhibī fī Fiqh al-Lugha wa Sunan al-'Arab fī kalām-hā*. Bayrūt: Mu'assasa Badrān li-al-Ṭibā'a wa al-Nashr.
- Ibn Kamāl Bāshā. 1991. *Dirāsāt fī Ta'sīl al-Mu'arrabāt wa al-Muṣṭalaḥ*. ed. by Ḥāmid Ṣādiq Qunaybī. Bayrūt: Dār al-Jīl.
- Īd, Muḥammad. 1988. *al-Istishhād wa al-Ihtijāj bi-al-Lugha*. al-Qāhira: 'Ālam al-Kutub.
- al-Jawālīqī, Maṣṣūr. 2002. *al-Mu'arrab min al-Kalām al-A'jamī 'alā Ḥurūf al-Mu'jam*. ed. by Aḥmad Muḥammad Shākir. 4th. ed. al-Qāhira: Dār al-Kutub wa al-Wathā'iq al-Qawmīya.
- Jawwād, Muṣṭafā. 1998. *Fī al-Turāth al-Lughawī*. ed. by Muḥammad 'Abd al-Muṭṭalib al-Bakkā'. Baghdād: Dār al-Shu'ūn al-Thaqāfiya al-Āmma.
- Juḥā, Miṣhāl. 1992. *Silsila al-A'māl al-Majhūla: Ibrāhīm al-Yāzījī*. Landan: Riyāḍ al-Rayyis li-al-Kutub wa al-Nashr.
- al-Jumay'ī, 'Abd al-Mun'im al-Disūqī. 1983. *Majma' al-Lugha al-'Arabīya: Dirāsa Tārīkhīya*. al-Qāhira: al-Hay'a al-Miṣrīya al-Āmma li-al-Kitāb.
- Khalīl, Ḥilmī. 1985. *al-Muwallad fī al-'Arabīya: Dirāsa fī Numuww al-Lugha al-'Arabīya wa Taṭawwur-hā ba'da al-Islām*. 2nd. ed. Bayrūt: Dār al-Naḥḍa al-'Arabīya.
- Khāqānī, Muḥammad. 1998. *al-Mufradāt al-Ajṇabīya fī al-'Arabīya wa al-Fārisīya*. Bayrūt: Dār al-Rawḍa.
- al-Kūsūfī, Bakr Ismā'īl. 2004. *al-Ishtiqāq wa Athar-hu fī al-Dirāsāt al-Lughawīya*. al-Qāhira: Mu'assasa Ālbā Birs.
- Madkūr, Ibrāhīm and Ibrāhīm Anīs eds. 1960. *al-Mu'jam al-Wasīf*. 2 vols. al-Qāhira: Majma' al-Lugha al-'Arabīya.
- al-Maghribī, 'Abd al-Qādir. 1908. *Kitāb al-Ishtiqāq wa al-Ta'rīb*. al-Qāhira: Maktaba al-Hilāl.
- Maṭlūb, Aḥmad. 2002. *al-Naḥt fī al-Lugha al-'Arabīya: Dirāsa wa Mu'jam*. Bayrūt: Maktaba Lubnān.
- al-Maṭwī, Muḥammad al-Hādī. 1989. *Aḥmad Fāris al-Shidyāq 1887-1801: Ḥayāt-hu wa Āthār-hu wa Ārā'-hu fī al-Naḥḍa al-'Arabīya al-Ḥadītha*. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Gharb al-Islāmī.
- MII=al-Majma' al-'Ilmī al-'Irāqī. 1980, 1983. *Majalla al-Majma' al-'Ilmī al-'Irāqī*. Baghdād: al-Majma' al-'Ilmī al-'Irāqī.
- MLAD= Majma' al-Lugha al-'Arabīya bi-Dimashq. 1928, 1959, 1965, 1999. *Majalla al-Majma' al-'Ilmī al-'Arabī*.

Dimashq: Majma' al-Lugha al-'Arabīya.

MLAQ=Majma' al-Lugha al-'Arabīya bi-al-Qāhira. 1935, 1953, 1961, 1991. *Majalla Majma' al-Lugha al-'Arabīya*. al-Qāhira: al-Hay'a al-'Āmma li-Shu'ūn al-Maṭābi' al-Amīriya.

MLAU= Majma' al-Lugha al-'Arabīya al-Urdunnī. 1993. *Majalla Majma' al-Lugha al-'Arabīya al-Urdunnī*. 'Ammān: Majma' al-Lugha al-'Arabīya al-Urdunnī.

Murād, Ibrāhīm. 1985. *al-Muṣṭalaḥ al-A'jamī fī Kutub al-Ṭibb wa al-Ṣaydala al-'Arabīya*. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Gharb al-Islāmī.

al-Qazzāz, 'Abd al-Jabbār Wahīb. 1979. *al-Dirāsāt al-Lughawīya fī al-'Irāq: Fī al-Niṣf al-Awwal min al-Qarn al-'Ishrīn*. Baghdād: Dār al-Rashīd.

al-Rāzī, Muḥammad ibn Abī Bakr. n.d. *Mukhtār al-Ṣiḥāḥ*. Dimashq: Dār al-Īmān.

Riḍā, Muḥammad Rashīd. 1906. *al-Manār: Majalla Shahrīya Tabḥath fī Falsafa al-Dīn wa Shu'ūn al-Ijtīmā' wa-al-'Umrān*. vol.9-6. al-Qāhira: s.n.

Sābā, 'Īsā Mīkhā'īl. n.d. *al-Shaykh Ibrāhīm al-Yāzījī*. 2nd. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif.

al-Shāfi'ī. 1988. *Taqrīb al-Turāth: al-Risāla*. eds. by Muḥammad Nabīl Ghanāyim and 'Abd al-Ṣabūr Shāhīn. al-Qāhira: Markaz al-Ahrām li-al-Tarjama wa al-Nashr.

Shāhīn, 'Abd al-Ṣabūr. 1986. *al-'Arabīya Lugha al-'Ulūm wa al-Taḥqīq*. al-Qāhira: Dār al-I'tisām.

al-Shāyī', Nadā 'Abd al-Raḥmān. 1993. *Mu'jam Lugha Dawāwīn Shu'arā' al-Mu'allaqāt al-'Ashr*. Bayrūt: Maktaba Lubnān.

Sībawayhi, 'Amr ibn 'Uthmān ibn Qanbar. 1999 : *al-Kitāb*. ed. by Imīl Badī' Ya'qūb, 5 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiya.

al-Suyūṭī, Jalāl al-Dīn 'Abd al-Raḥmān. 1998a. *al-Muzhir fī 'Ulūm al-Lugha wa Anwā'-hā*. ed. by Fu'ād 'Alī Maṣṣūr. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiya.

_____. 1998b. *al-Iqtirāḥ fī 'Ilm Uṣūl al-Naḥw*. ed. by Muḥammad Ḥasan Muḥammad. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiya.

al-Tahānawī, Muḥammad 'Alī. 1996. *Mawsū'a Kashshāf Iṣṭilāḥāt al-Funūn wa al-'Ulūm*. ed. by 'Alī Daḥrūj and Rafīq 'Ajam. 2 vols. Bayrūt: Maktaba Lubnān.

Ṭarazī, Fu'ād Ḥannā. 2005. *al-Ishtiqāq*. Bayrūt: Maktaba Lubnān.

Taymūr, Maḥmūd. 1961. *Mu'jam al-Ḥaḍāra*. al-Qāhira: Maktaba al-Ādāb.

al-Tūnjī, Muḥammad and Rājī al-Asmar. 1993. *al-Mu'jam al-Mufaṣṣal fī 'Ulūm al-Lugha*. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiya.

'Umar, Aḥmad Mukhtār and Nadīm Mar'ashlī eds. 1999. *al-Mu'jam al-'Arabī al-Asāsī*. Tūnis: al-Munazzama al-'Arabīya li-al-Tarbiya wa al-Thaqāfa wa al-'Ulūm.

al-'Uṣaymī, Khālīd ibn Su'ūd. 2002. *al-Qarārāt al-Naḥwīya wa al-Taṣrīfiya li-Majma' al-Lugha al-'Arabīya bi-al-Qāhira*. al-Riyāḍ: Dār al-Tadmuriya.

Ya'qūb, Imīl Badī'. 1993. *Mu'jam al-Awzān al-Ṣarfīya*. Bayrūt: 'Ālam al-Kutub.

al-Yāzījī, Ibrāhīm. 1984. *Lugha al-Jarā'id*. ed. by Naẓīr 'Abbūd. Bayrūt: Dār Mārūn 'Abbūd.

- _____. 1993. *Abḥāth Lughawīya*. ed. by Yūsuf Qazmā Khūrī. Bayrūt: Dār al-Ḥamrā'.
- Yūsuf, Ibrāhīm al-Ḥājī. 2002. *Dawr Majāmi' al-Lugha al-'Arabīya fī al-Ta'rīb*. Ṭarābulus: Kullīya al-Da'wa al-Islāmīya.
- al-Zarkān, Muḥammad 'Alī. 1988. *al-Jawānib al-Lughawīya 'inda Aḥmad Fāris al-Shidyāq*. Dimashq: Dār al-Fikr.
- Zaydān, Jurjī. 1987. *al-Falsafa al-Lughawīya wa al-Alfāz al-'Arabīya*. Bayrūt: Dār al-Ḥadātha.
- Ẓāzā, Ḥasan. 1990. *Kalām al-'Arab min Qaḍāyā al-Lugha al-'Arabīya*. Dimashq: Dār al-Qalam.
- Ziyāda, Ma'an. 1978. "Madkhal li-Dirāsa Muṣṭlahāt 'Aṣr al-Nahḍa al-Siyāsīya Khāṣṣatan," *al-Fikr al-'Arabī*. Ṭarābulus: Ma'had al-Inmā' al-'Arabī. 2, pp.260-274.

[和文文献]

- 池田修. 1969. 「10 世紀以降のアラビア語研究の歴史」『大阪外国語大学学報』 22, pp.35-49.
- _____. 1976. 『アラビア語入門』 岩波書店.
- 太田聡. 2001. 「混成語考」『意味と形のインターフェイス』 中右実教授還暦記念論文集編集委員会（編）、くろしお出版. 下巻, pp.861-871.
- 小杉泰. 2006. 『現代イスラーム世界論』 名古屋大学出版会.
- 竹田敏之. 2006. 「現代エジプトにおける文法改革—イブラーヒーム・ムスタファーの古典文法批判と文部省委員会—」『日本中東学会年報』 22-2, pp.29-52.
- _____. 2009. 「アラビア語はなぜ語尾変化をするのか—現代アラブ世界の形成と文法学におけるイウラーブ論争—」『イスラーム世界研究』 第 2-2 号（印刷中）
- 田中春美他. 1988. 『現代言語学辞典』 成美堂.
- 内記良一. 1965. 「近代アラブ語」の定義に就いて」『東洋文化』 東洋大学・東洋文化研究所. 38, pp.19-26.
- 新妻仁一. 1992. 「アラビア語アカデミー成立の歴史的背景—シリア近代教育史の一側面—」『アジアの言語と教育』 亜細亜大学アジア研究所. pp.73-90.
- 西尾哲夫. 2006. 『アラブ・イスラーム社会の異人論』 世界思想社.
- 湯川武. 2008. 「『歴史序説』にみるイブン・ハルドゥーンのアラビア語観」『イスラーム世界のことばと文化』 佐藤次高・岡田恵美子（編）、成文堂. pp.106-129.